
リリカルなのはアネタ？

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはアネタ？

【Nコード】

N4783N

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

普通に学生として過ごしていたら爆破によって死亡。

幽体離脱というものを体験した。俺はたまたま死神の見つかり転生するはめとなった。その先はリリカルなのはの世界でひゃっほーい！！とテンション高くするのだが・・・・・・・・原作100年前つてどうよ・・・・・・・・

プロローグ

俺の名前は田中よしき。

普通の高校生であり、特に凄い力（超能力や魔法）あるわけでもない。

むしろあると言った奴に対して黄色い救急車を呼ぶことが出来るくらいには普通の常識人だと思う。

そんな俺でも趣味の一つや二つぐらいはある。

アニメ鑑賞である。

俗にいうオが付く種族が俺だ。

まあ、それはともかく。

俺は学校帰りの途中に鞆が突如爆破した。

もちろん範囲は狭く、なんか狙われたように俺の体だけが吹き飛んだらしい……。

途中で意識が無くなったおかげであまり分からないのだが……。

（これが世にいう幽体離脱か）

体を失い魂のみになっていると思われる今の状態、意外に冷静であ

った。

（しかし、オカルトをこんな感じで実感するとは……やはり人生はこうでなくては）

「ひゃっほいっ」

どこからともなく声が聞こえる。

そこにはゴスロリの少女がいた。

（誰？）

どうやら魂の状態になったせいと同様はしなくなったようだ。

「あえていうなら神様かな……」

（はぁ……神様ですか。
てつきりこーいう仕事は死神がやると思ったんですけど、神様直属ですか）

「まあ君が何を考えてるかはともかく、君には転生してもらってからよろしくっ」

（転生って……どこかの二次作品じゃないんだから。
で？なんで俺が転生するの？）

「ん？ああ、それは調度君を見つけたからだよ」

意味分かん。

（この頃の神様は頭が足りないんですかね……）

「でだ、君にはとある体に入ってもらって、とある世界で君が君であり続けられる限り人生を謳歌してもらいたいわけだよ、田中君」

（は？体ってもうあんの？）

「ありますよ、それもヤバイのが」

（それって問題あるんじゃない？）

「あ、それならとある方より許可は出てるので好きに使って良いみたいですよ」

（本人の許可は……？）

「もらってませんよ」

神様それで良いのか。

（それって途中で覚醒する可能性があるんじゃない？）

「あ、大丈夫ですよ。

トウヤ様が本気でボコしましたから目覚めことはありません」

（あ、そう……。

で？世界っていったい何処の世界に送るんだ？）

「魔法少女リリカルなのはっていう作品ですが」

うは！まじかよ！
漲ってきた！！

「あ、そうそう。」

八神はやてとの接触は極力避けてください」

（な！？何故に！？）

「あゝ、それはですね貴方に入る体に問題がありまして」

（問題ありすぎだろこの身体！）

「ハハハハッ……。」

今から田中君が入るその身体の名前は八神流星って言ってね、平行世界の八神はやてなんです。世界修正のせいで、ひじょーに面倒臭いことになってるんですけど、これが一番最適ですし」

（何故にそんなピンポイントな身体を俺に使わせる！）

「だってスペック高いのって、これしかないんですよ！」

（具体的には？）

「魔力保有量オーバーSSS。」

レアスキルは《時間制御》及び《電気変換》
体術スキルなんて闘神クラスですよ！
マジありえません！」

（強過ぎたるそれ！）

時間制御とかD I。様かよ！)

「驚くのはこれからです。

田中さん時間制御には大きく別けて三つのランクがあるのはご存知ですか？」

(いや、全然)

「そうですか、なら説明させてもらいますね。

時間制御には【時間加速】【時間停止】【時間逆行】とあります。

時間加速は自分の行動を早くする力です。

時間停止は自分以外の世界を停止させる力です。

時間逆行はあらゆる時間を戻す事ができる力です。

ランクとしては時間逆行>>時間停止>>時間加速というランクが私達の共通認識としてあります。

その中にある時間逆行を完全に極めたのが、その貴方に入る身体です」

(そんな奴に勝った奴って、どんなばけもんだよ……)

「トウヤ様は、神の中でも戦闘能力は創造神と引きを取らないくらい凄いお方なんですよ」

(へえ)

「では、転生しますか？」

答えはもちろん。

(お願いします)

そして新たな身体と共に俺はリリカルの世界に降り立った。

…… 100年前の……世界に……。

それから永い月を得て、分かったことは9歳から成長が進まないことや、能力がキチガイ過ぎてこと。

後、途中で死にかけのアリシアを見かけたんでライフリンクを繋いだ。
どいた。

それから目茶苦茶懷かれて一緒に旅に出ることになった。

理由は管理局にありってね……。

第1話

「行くぞ〜アリシア」

「うん分かったよ。今すぐ行くから待っててね流星お兄ちゃん」

「じゃ、行くか。アリシア本当に後悔ないんだな？」

「うん！お兄ちゃんのためなら私頑張るよ！」

「ほんと可愛ゆくて健気だなアリシアは」

俺はアリシアに近付き頭を撫でた。

アリシアは気持ちが良いのか目を細め、俺はアリシアの頭を撫でつつもエリアサーチを行い、周りに管理局が居ないか確認した。

「数は12……ランクAが8人AAが4人。
中々に戦力揃えて来たな。
アリシア戦闘準備しておけ」

俺は手をアリシアの頭から退かすとどこか名残惜しそうな顔をして。

「うん分かった……。
さっさと片付けちゃお、そしたらどこかで遊びに行こうよ！
『ボルトライトニング』セットアップ！」

一瞬にして、いつものように向日葵の満面の笑みを浮かべ、フェイトと同じ防護服を着服し両手には漆黒の鎌が携われている。

「いつも思うがその格好まるで死に神だな」

「私はお兄ちゃんの邪魔をするような奴に対しては死に神的存在だから、あながち間違っていないかもしれないね」

「分かった分かった。だが間違っても相手の魂を刈り取るような戦いするなよ、後々面倒臭いことになるからな」

「うん！お兄ちゃんの為ならどこまでも頑張るからそこで私の格好良いところ観ててね」

魔法陣を展開し、数10個近いスフィアを周りに展開、フォトンランスを打ち出す

アリシアは良い笑顔で次々と迫り来る魔導師達をフォトンランスの弾幕で打ち落としていく。

「私精密射撃苦手なんだよね、でもこうやって数を増やせば遠くからでも撃てるから便利なもんで。」

「……魔力は馬鹿食いだけど……」

アリシアのフォトンランスの弾幕をくぐり抜けながら無傷でいた魔導師など一部除いて存在せず、普通は来る前に落とされるか、来たとしても何かしらのダメージは負っているるので冷静に対処すれば疲労による蓄積でコチラが勝つ

「こっちの魔法が非殺傷だから良い気になって突っ込んで来やがって……。

殺傷モードだったらどうするんだよ、確実に死んでるよなコイツら」

周りにエリアサーチを掛けながらまだ動ける魔導師がいないか確認し、アリシアはデバイスを待機状態に戻した。

「じゃ、どこかに遊びに行こうよ！」

そっぴえばそんなことも言ってたな……。

「どこに行くか……」

「私お兄ちゃんの故郷の地球に行ってみたい！」

なんだと……。

「あそこには知り合い居るし、あまり行きたくないんだが……」

「駄目なの……？」

アリシアは涙目になりながらも上目使いという、なんとまあな高等テクニックを使ってきた。

そこまでして地球に行きたいのかアリシアは……。

「わーたわーた、だからそんな涙目になって訴え掛けないでくれよ。」

体格的にイジメにしか見えんから涙目はやめてくれ」

俺9才

アリシア6才

どこをどうみてもまだ子供である。

傍から見ると虐めているかのように感じるので自重して欲しいところだ。

「やったー！流石にお兄ちゃん、妹にせがまれると何故か断れないその優しい体質に乾杯♪」

ん〜。なんかけなされてる気がせんでもない言い方だな我が妹よ…
…。

妹といっても血は繋がってないし、アリシアとは兄貴分として接しているだけにすぎないんだがな。

まあ、それが嬉しいのだろう。

憧れと言い換えてもいいかもしれないな……。

「金髪って目立つよな日本だと……。
むしろ目立ちたいのかアリシアは……？」

アリシアのことだから狙ってやらなそんなこともない気がするでもないが……。

「……確か……座標は……よし！完了！」

お兄ちゃん道は開けたよ！さあ行こう！今行こう！すぐ行こう！
勿論拒否権は無いからね♪」

最初の純情なアリシアはどこへ……。

なんか一本ネジが抜け落ちてる子になってしまった。

笑顔でミシミシと音を発てながら腕を掴むなよ……。痛いんだから。

第2話

「あ、どうも……」

「こちらこそ……」

ヤバイ、なんか知らぬが空気が重い。アリシアめ……転送する時は気をつけろといつも口をすっぱく言ってるのに学習せん奴だ。

それに此処って管理外世界じゃなかったか……。
魔法見せたらまずいんでは？

いや、しかし我が故郷だし、相手もまだ子供だからごまかせばいけるのでは……。

「あの……さっきのは……」「手品だ」「ああそうなんだ手品なんだ……」

アリシアなんだその目は……やめなさい。

もともとアリシアが悪いんだし、そんな目で見るなよ

「アリシアさっさと出るぞ。」

このままでは不法侵入で捕まりかねん……ってなに優雅にお茶してるの!?!」

アリシアとその子は仲良くなったのか、今さっき入れましたとばかりに湯気を立てている紅茶をパラソルのあるテーブルで飲んでいる。

「私の名前は八神アリシア。すごく語呂は悪いけど偽名じゃないよ。そこに居る運がなさそうな人は私の兄ちゃんの八神流星」

「よっ！それとアリシア運が無いのは余計だ！可愛いきゃなんでも許されると思ったら大間違いだぞ」

「クスッ……。面白いねアリシアちゃんは。私の名前はすずか」

「おゝすずっちか」

「すずっちか／＼／＼／」

すずかは照れているのか頬が若干赤い。

そこで俺は思い切って言ってみることにした。

「なあ……。俺達完全に不審者だぞ。

何故そこまで信用してるかはともかくとして、怪しいと思わないのか？」

「???怪しいとは思ってるよ」

「あ、いやすまん。言い方が悪かったみたいだ。

こんな不審者を追い出さず、このまま居候させて良いのかって聞いているんだ」

「???だって私達『友達』でしょ。それに流星君もアリシアちゃんも悪さをするような人には見えないしなにより信用してるから」

「信用してくれるのは嬉しいが、……何時俺が友達になった……」

「ん？アリシアちゃんが私のことをすずっちと呼んでくれる辺りから連鎖的に繋がりました」

「何故敬語……。すずっち実は友達いないんじゃない？」

「え！？違つよ！親友にアリサちゃんとなのはちゃんがちゃんとい
るよ」

「後は……？」

「え……？」

「友達二人しかいないの？」

「あ……っつ……」

「おいおいアリシアお前も人の言えんだろうが」

「え？違つよ、私はただ要らないだけだから」

「なんつつ寂しい奴。俺も人の事言えないがな」

「ねえ……アリシアちゃん私達友達だよね……？」

「当たり前だよすずっち。私達は名前を交換してから友達だよ」

「うん！アリシアちゃん」

ポクポクチン！

「あ、思い出した『リリカル』か……」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「いや、気にするな。自己解決したから」

そうそう俺って転生者じゃん。

アリシアが追われ追われて忙しかったせいか完全に忘れていた。

あれから100年長かったな……。

そう、アリシアが不老なってから早20年ぐらい？

ヒュドラ事件から助けたのは良かったんだけど死にかけてたからな……仕方なくライブライン繋いだんだっけ？

これあの能力の影響だよな……。

そのせいでモルモットとして実験台になりそうなところを俺が連れ出したんだっけ？

まあ、死にかけた奴が一瞬にして復活したんだから、マッドの奴らテンションがハイだった訳だ。

そして俺の能力もとい、レアスキルは……。

レアスキル『時間制御』

名の通り時間を制する力。

死ぬと勝手に逆行現象を起こし、死ぬ前の自分に戻るっていうんだからチートだよな……。

だから、俺事実上『不老不死』なんだよな……。まったく面倒臭い……。死にたくても死ねないなんてな……。

だから、今ここに居られる訳だか……複雑だ……。

「どうしたのお兄ちゃん？急に黙ったりして」

「少し過去を振り返ってた」

「あれ？過去は振り返らないじゃなかったの？」

「突然湧いて出た」

「なにそれ……」

「気にするな……ちよつと昔を思い出したただけだ……それと気付いたか？」

「うん……この反応ロストロギアだね」

「ちょっと行ってくるからここですずかと一緒に遊んでろ」

「ん〜でも心配だしな……」

「まあ……お前も子供だ。たまには遊びたくなるだろ？それにこのまま帰るのも悪いだろうしちよつとすずかと遊んでこい」

「分かった……」

「わがままも程々にな。すずかちよつと用事が出来たから行ってくる」

「え？帰るの？」

「アリシアは置いておくから安心しろ」

そしてロストロギアの反応のある方に向け転移した。

（お兄ちゃん……もう隠す気ないでしょ魔法）

（隠す気がなくなってきたな……まあすずかし）

（すずっちだからね……。それとさっきの会話を念波でしなかった件について）

（忘れてた）

（だよね、忘れてたよね）

（ロストログアの反応に近い……切るぞ）

（了解。かんばってね）

第3話

「え……なに。トト。の怒り？」

建物は崩壊しており、人が通る通路も自動車を通る通路もはひび割れ人が歩けない様になっていた。

ロストログアの反応がある方へ視線を向けると巨大な木が一本あり、場違いな存在感出していた。

「なに、ロストログアってユグ。ラシル？」

「まっ……良いか」

「とりあえず中に人が居るのは知っている」

「俺には封印なんて芸当出来ないから原作通り現地魔法少女にでも任せるか」

魔力反応が収縮している方を向けば、白のバリアジャケットを着たツインテールの子がピンク色の魔力光を発しながらデバイスをユグドラ。ルに向け……。

「デイベインバスター!!」

デバイスの先から放たれたピンクの閃光は見事にユ。ドラシルを貫き。

「ジュエルシード。ナンバー？番封印！」

根源となるジュエルシードが封印されたことにより、ユグドラ。ルが光の粒子となって姿を消した。

しかし、。グドラシルが起こしたこの大惨事は大きな傷痕を残し、後で七不思議となって語られる事を俺らは知らなかった。

「どうするかね……。」

原作キャラと合っちまったからにはなにか行動を起こせと俺の魂が叫んでいるような気がする」

結界が解けた様で、周りの人が地面のひび割れやら見て凄く驚いていた。

その中、一般人に紛れてなのはがレイジングハートを握りしめた。現状の傷痕を見て決意を決めてるのだろう。

俺はスツとなのはの横まで移動して、耳元でこう囁いた。

「幼女臭が♪幼女臭可愛い女の子♪」

なのはは鳥肌を立て後ろを振り返ろうとするが恐怖で体が動かない。肩に乗っているフェレットもなのはと同様恐怖でガタガタしながら後ろを振り返ろうとはしない。

なのは思った。
さっきの生々しい声は誰だろう……。
そして、何故私の耳側で歌ったんだろう。
なにより歌詞がアレなんだろう……。
振り返る先にデブのオタクがムヒヒしながらハアハアしていたらと
考えると恐怖で後ろを振り向けない。

ならば逃げるべきか……。

（ユーノ君助けて）
私はこの状況を打破すべく、ユーノ君に助けを求めた。

（分かったよなのは……。僕が後ろの奴にバインドで足止めするか
ら、その隙に逃げて！）

一般人に対して魔法を使うのは犯罪です。

（今だ！なのは走れ！）

（うん！）

なのはとユーノは後ろを一度も振り返ることなく、走り出した。

「まったく……修業が足りないな二人とも」

手、足、首、腰、に巻き付いているバインドをバインドブレイクし、
走り去ったなのはの方を見て溜息をした。

「やれやれ……流石に9才のあいづらには、ちと厳しかったかな」

勿論精神的ダメージのことです。

「さて、帰るか」

転移してすずか亭に行った。

第4話

着いたその先にはアリシアとすずかが猫と一緒にじゃれあっているのが見て取れた。

流石は猫ハウス。

「アリシア帰ったぞ」

しかし、アリシアはすずかと一緒に猫をモフモフしていて俺の存在に気が付かないようだ。

畜生！俺だって猫と一緒にモフモフしてえよ！したくてしたくてたまんねえよ！だけど俺が近寄るだけで猫達に逃げられるんだぞ。

俺が何かしましたか！

半径1メートル以内に猫が居ないとか、どんだけ俺避けられてんだよ！

「アリシアは、どうやらあっちの世界行っちゃったから、俺は俺で周りの散歩してくるかな……」

散歩していると、この屋敷がどれだけ広いのかよく分かった。

「お前は……」

「貴様は……」

何故か恭也とエンカウント。

「子供の不審者か……」

「いや、お前に言われたくないぞ。黒ずくめ」

「君は戦士か？さつきから隙がよつだが……まさか暗殺者か！」

「ちげーよ。ただの客だ」

「しかし君はかなりの腕みたいだ。
一本やらないか？」

恭也は真剣を取り出し、構えをとった。

「仕方ねえな、紫電、雷電。
久々の剣でのやりあいだ。行くぜ！」

腰に挿さっている刀を取り出し、二刀流の構えを取った。

「「いざ尋常に勝負！！」」

恭也の姿が消えた。恭也は神速を使い距離を一気に詰め掛けてきた。

「ちっ！領域加速か」

流星に恭也の二刀が襲い掛かるが、紫電で弾き、横に避け、雷電の一撃を恭也にお見舞いした。

しかし、雷電は恭也に直撃せず恭也は後ろに向け神速を使い、雷電の一撃を避けた。

「逃がすか！」

流星は恭也に向け跳躍。

恭也はそれを迎撃。

流星が攻め、恭也が守り。

二人の刀はぶつかり合い火花が散る。

（強いなこの子は！）

恭也は息も着かせないこの戦いを心の底から楽しんでいた。

しかし、同時に焦りも生じてきた。

さつきから流星の攻撃には途切れが無い。

恭也が無茶をして一撃『貫』を放ったがギリギリの所で避わすされ、更に辛い状況になっている。

しかし、恭也は一つだけ分かったことがあった。

（攻めに転じている間、得物で弾かず避けてるだと……！）

だから実現できる流星の一方的な攻め。

次第に恭也の刀を持つ手が痺れはじめ、感覚が失くなってきた。

焦りは禁物。

だが、どうしても今を打破出来る状況を思い付かない。

恭也はこのまま守りで勝つのは無理と分かってはいるが、どうやっても先手を交換できない。

（後ろに神速で一旦体勢を立て直すか）

恭也はそう考え、流星の二刀を強く弾いた。

（今だ！）

神速で後ろに下がろうと構えた瞬間。

「それは悪手だ！その軌道読ませて貰う！『蒼天の要』！」

流星の体内時間が加速。

弾かれた紫電を超高速で振り下ろした。

（なっ！）

あまりの速さに構わず刀で弾き返してしまった。

二刀目が襲い掛かるが、その前に神速で後ろに下がる事に成功したかと思われたが……。

「だから悪手だ！」

流星は恭也の行く神速と同じ速度で追尾。雷電を振りかぶった。

同時に骨が碎ける生々しい音と激しい痛みが恭也を襲った。そして恭也はその場に気絶した。

「まあ、峰打ちだし大丈夫だろ。……骨が砕けた音は聞こえたがな……」

スターライトブレイカーの直撃受けるよりはいいだろ。

「戦闘民族高町だし、この傷ぐらいすぐ回復するだろ」

気絶して地面に倒れ伏してる恭也を横目で見て、少し苦笑しながら。

「魔法ばつかの使っていたせいか、剣術のレベルが落ちてきたな……まあ、さっきの打ち合いのおかげで剣士としての勘は戻ったがな。少しは感謝してやっても良いか……」

散歩をして、多少のハプニングがあつたが別に悪くはなかった。

「お兄ちゃん、やっと戻って来たんだ」

「ああ……少し妹に無視されて少しいじけてたな。森の中で……」

「あれ？私お兄ちゃんのこと無視したっけ？」

「アリシアが猫に揉まれ、へブン状態にちよつとな……」

「……………まあ……………それはそれで。」

（でロストロギアはどうだった？）

「すずっちも言っちゃってよ、ぬこのモフモフは最高だって」

「良いな良いな、俺なんて近寄れもしねえんだぞ。」

（現地魔法少女が回収していった）

「可哀相だね流星君は」

「それはきつと、生きてる世界が違っただよ。」

（大丈夫なの？あの反応からしてかなりヤバ気な物だと思うんだけど）

「アリシア戻ってこーい。それと俺は常人だ」

（気にするな、そのうち勝手に終結して終わるから）」

「地球外生命体はどこに！

（そんな人任せで良いの？）」

「……………」

（アリシア念波しながら会話は止める。電波を受信してるぞ）」

「（´Д、）酷す。」

（気付かなかった……………」

「アリシアちゃん大丈夫？」

「え？何が？」

「さっきから流星君の方を向きながら白目剥いてたけど……」

「うつそん!」

「気付けよ……」

「お兄ちゃん!気付いてるなら先に言つてよ!」

「知らぬよ……色々と無茶した代償だ」

マルチタスクをかなり広げて使用し過ぎのせいか、アリシアはちょっと念波をしながら会話をすると、何故か白目になる特性が出来てしまったらしい。

「ちょっと目をつぶれ、アリシア」

「え?ま、良いか」

チュツ……

俺はアリシアの額に口づけをした。

「// / なっ……!」

「/ / / / /」

アリシアは顔を真っ赤にさせ、すずかも顔を赤くさせながら目をそわそわさせている。

「クククッ……」

せいぜい恥ずかしがるがいい！」

「／／／お兄ちゃんなんか久々だね」

え？逆に喜んでるよ……」

「流星君大胆／／／」

「えゝ、仕方ない。」

アリシアばっち来い！！」

俺は腕を広げ、アリシアを受け止められるよう足に力に入れ、倒れないようにした。

「わゝゝお兄ちゃんの臭いがするゝ」

突っ込んで来たアリシアは俺の腕の中にすっぽり入り、鼻を俺に押し付けてきた。

「すずか……なんかやばそうだから俺達帰るな……」

「お幸せに……」

すずかは、顔を真っ赤にさせながら手を振りお別れを済ませた。

その間もアリシアは俺から離れず、アリシアを抱える感じですよすずかの家から出て行った。

第5話

「なあ、何時まで抱き着いている気だ？」

「挑発したお兄ちゃんが悪いんだよ／＼／」

挑発って……………。

ふと、後ろから邪念の籠った視線を感じた。耳を澄ませば後ろの方から荒息を發てているのが聞こえ、中年のオッサンが物端に隠れて俺達……………というよりアリシアの後をつけて来ているようだ。

「金髪幼女のデレ……………良い……………凄く良い……………！」

ハアハア……………！お兄ちゃん大好き！（裏声）

うは！死ね！リア充なんて滅んじまえ！非モテに詫びて謝罪しろ！」

聞こえてくる内容は色々アレで、ストーカーという事と変態という事が分かった。

「良かったなアリシアモテモテだぞ」

俺がそう言うのとアリシアは凄く嫌な顔をした……………かと思ったら突然笑顔になりはじめた。

まさか……………そういう趣味なのか……………。
お兄ちゃんアリシアの将来が心配だ。

「それは「俺が守ってやるぜ！」フラグかな!？」

期待した目で俺を見てきているが、俺はアリシアとは目を合わせず、そつとアリシアの頭の上に手を乗せた。

「可哀相に……」

青空を見上げながらポツ……と小声で言った。

いつからアリシアはお姫様思考になったのか、お前は守られるよりも守る方の人間だろうが。

妄想も大概にしないと相手も逃げて行っちゃうぞ。

将来アリシアと結婚する人が苦勞が絶えないだろ。

「しかし、いいかげんウザったくなってきたな。

アリシア「お兄ちゃん」恐れからついて来ないで」(涙目&上目づかい)「で後ろに居るのを下がらせてくれないか？」

「お兄ちゃん大好き」

「いや俺じゃなくて、後ろに居るムヒヒハアハアしている奴に言ってくれ。

襲ってきたら容赦なく殺っていいぞ」

「嫌だよー！なんで私がそんなこと言わないといけないの?！」

あんなのに私話し掛けたくないし触れたくもないよ！

あんなオタクなんて滅びれば良いのに!」

元オタクの俺にはきつい言い方だぜ……。

「まあ……冗談だし。」

「……今思ってたんだが俺らどこで住むよ」

「普通にホテルで良いんじゃないの？」

そう言っただけアリシアはラブホテルを指差した。

分かっていて指差してるなら、俺は一度アリシアを殴らないといけない。

「なあ……アリシア分かっててやってるのか、それとも天然なのか？」

「ハアハア……なわけないじゃん。」

私とてもピュアだよ。

ピュアダヨ……。

今日はとても疲れたからあそこで休も？

ね！」

俺は無言で一発アリシアの頭に拳を入れておいた。

「痛い！何するの！？」

「躰に体罰要ると思うんだ。俺は」

アリシアは痛かったのか殴られた頭を押さえ涙目になりながら俺を睨んできている。

「流星ちゃんには……流星ちゃんには解らないよ!」

「理解したくねえよバロー」

「え!? ひど!」

「あんなとこに行こうとするお前の神経が分からん。
いざとなったら、廃墟かホテルで認識阻害でも使うことも頭にいれておかないとな」

「私そんな嫌だよ。」

お兄ちゃんの故郷なんだから家の一つや二つあるよね?」

「……『在るが』『無い』……」。

あそこは俺の所有地ではない……」。

そもそも俺は本来なら在ってはいけない存在なんだ……此処にいやいけない存在なんだよ……」

神様が言った。

『八神はやて』『八神流星』は同時に存在してはいけないと。

俺の転生は、どうやらどこかにある平行世界の『八神はやて』の立場そのものだそうで、俺は『八神はやて』に会って世界修正が働き、どちらかが消えることになるそうだ。

『八神はやて』が死ねか『八神流星』が消えるかどちらかしかない。

まあ、会わなきゃ問題ないわけだが。

「増えてるね……」

「増えてるな……」

まるでゾンビの群れのようにゾロゾロとついて来るのは、ある意味ホラーだと表現してもいいだろう。

さらに一人から二人、二人から三人と増えていく感染者が増えてるんですね、分かります。

つて……ちげー!!!

ああなんかアリシア怯え始めちゃったじゃねえか。

群れをなしてついて来るオタクの集団は、数を着々と増やし、隠れているのか数のせいで隠れきれていない。

「流石のお兄ちゃんもこれにはドン引きだわ」

「醜い醜態をさらしてあの人達なにしたいんだろうね」

「俺は面白きゃ良いけどな……」

「お兄ちゃん、もっと妹を心配しようよ」

「はあ……仕方ない、逃げるか。全速力で」

流石の俺もこの視線の中ずっとは居たくないからな。

「アリシア……片目をつぶれ」

アリシアは少し顔を赤くしたが大人しく片目をつぶり、俺はアリシアの片手を手に取った。

若干赤みの掛かっていた顔が、突然真っ赤に染まり、アリシアの手からは汗が溢れ出す。

「あまり意識するか、あまり見ようとすると、あまり理解しようとするな……経験を積むためとはいえ『時間』を理解するんだ。脳死するぞ。徐々に慣れるんだ」

「え？」

「超える！」

「気持ちわる〜」

「よしよし」

俺は今アリシアの背中を摩っていた。

時間制御により、アリシアは時間を見たが、やはりまだ理解しきれないようで、まるで二日酔いしたオッサンの如く嗚咽を漏らしてる。

「お兄ちゃん、責任とってよ」

「ああ諦めろ、筋肉痛みたいなものだ。そのうち戻るから安心しろ」

「乙女にこんな事させて心苦しくないの!？」

「神経は図太い方だな、あんまり心苦しくないぞ」

「わゝゝ無神経」

「ずいぶん根に持ってるな」

「当たり前でしょ!」

「はあ……。ん？」

ふと、視線の先に栗色ツインテールの女の子が目に入った。

「どうしたの……浮気はいけないと思うの、お兄ちゃん!」

「何を言うか……」

「私では不服だというのか!」

「お前誰だよ……」。

あれが今回のロストログア『ジュエルシード』を回収した魔導師だ」

「そうなんだ。確かに凄まじい魔力保有量だね、AAAぐらい?」

「そうだな。魔導師としての素質はありそうだが、戦闘者としては駄目だな。殺すのに躊躇しそうな奴だな。みんな平和みんな幸せ……そんな理想を願っているタイプだろ、アレは」

「私は良いと思うけどな」

「……アリシア……あいつには近づくな」

「それはなんで……？」

「余計なことしなければ物語のハッピーエンドは揺るがないからさ。……それより寢床を探すか……」

そんなことよりも今は目の先の生活を心配したほうがいいだろう。

介入するかいかといえば、俺は界介入しないほうで日々平穩を満喫する方である。その中に色々とトラブルがあって日常が楽しくなるだけの事柄ならば、俺はむしろ歓迎する性分である。

確かな日常はこの手に。

我が存在に意味は要らず。

世界はこんなにも美しい。

アリシアとのごたごたがあったのち最終案として寢床が『廃墟』となった。

探せは意外にあるもので、ボロボロで幽霊が出てもおかしくない屋敷だった。

かなり結構でかい……。

壊さないのはきつと屋敷の呪いとかで無理なんだと俺は推測した。

とりあえず寝床は見つかったんで、安堵している。

中に入れば所々が薄汚れているのが分かり、天井なんかにはクモの巣がそこらかしこにある。

少し歩くと扉があり、扉の横には階段が二階にまで伸びている。今は二階に行こうとは思われないがいずれ行ってみたいと思う。

目の前の扉を開き、そこにあったものとは……。

第6話

寢床を探し、たどり着いた先は幽霊館のようなオーラを放つ不気味な洋館だった。

住居として機能しているか確かめるべく、中に侵入したところ、使い果たされたアパートの如く床や天井が痛み、今にも崩れ落ちそうだった。

ミシ……！ミシ……！

もの静かな館からは一歩踏み出す度に床がへこむような音がハッキリと聞こえた。

二階に通じる階段があるが、今は無視しておこう。

後ろからはアリシアの笑う声が聞こえる。

「ハハハハッ！！ホラーだ！めっちゃホラーだ！怖いよ……リアルでめっちゃ怖いよ。お兄ちゃんヘルプミー！」

アリシアはあまりの怖さに、恐怖を通り過ぎて笑ってしまっているようだ。

その証拠にアリシアの目が笑っていない。

アリシアと俺が体を密着させているせいで体が動きづらいが、アリ

シアが手を腰に回して更に強い力で抱きしめているため、俺から離れようとはしない。

少し歩く先には赤い扉がある。

「赤い扉って……なんつう趣味してるんだか……」

目の前にある扉のドアの部を掴み回すが扉は中々開かない。

仕方なく扉を破壊して開けさせるかと思っていると後から人の気配を感じた。

「こらこら、なに勝手に人ん家入って来てるの……ってなんだ子供か……」

その人は溜息を一つ吐き警戒心を緩めながらも俺達の目をじっと凝視している。

「読めないか……」。

まあ、それはそれで。僕の名前はそうだな……レッドとでも名のっておくよ。

君達の名前は？」

さっきのレッドの『読めなかった』は凄く気になるが見た感じ悪い人ではなさそうだ。

「とりあえずなんだ……」。

私の名前は八神アリシア。

語呂が悪いけど偽名じゃないよ！

お兄ちゃんの妹やってます！よろしくね！

」

「俺の名前は八神流星。
そこに居るアリシアの兄だ。
外見についてはあまり突っ込まないでくれると助かる。説明めんどくさいからな」

外見云々とは、アリシアの金髪に赤眼、俺の黒髪に金色の瞳、腹違いなんて目じゃないぜ！と言わんばかりの共通点のなさ、あ……能力は共通か。

「なんていうか随分大人伸びてるね。
で、君達は此処に何しに来たのかな？」
「廃墟があると聞いて来た」

話に聞くと、確か此処は無人だと言われていた筈だ。

「おおー！僕と同じ家なき子か！」

同じって……。

「これが噂に聞くホームレス?!
私初めて見ちゃった！」

「いやホームレスじゃないし、ちゃんと家はあるからね。
……不法だけど……」

「はあ……アリシア……俺達がホームレスということを忘れるな」

「わゝ、意外に身近にいたことに私は驚きを隠せない！」

お兄ちゃん……不潔だよ……」

「意味分からん」

アリシアは悩んでくだらないことでも考えているのだろっ、さっきからアリシアが俺を哀れみの目で見てきている。

「駄目だよお兄ちゃん！

そんな発展場なんかで体売っちゃ……ジュルリ……！もう仕方ないなお兄ちゃんは……私が貰ってあげるから安心してね。純潔は私が護る！」

もう嫌この子……。

「君の妹は随分想像豊かなんだね……」

レッドは苦笑しながら言った。

「なあ……レッドって女？男？」

唐突の質問に平然な顔しているとは、慣れてらっしゃる証拠だ。

レッドの髪が長いせいで性別の判断がしづらい。

髪だけならばまだ男特有のアレとか女特有のアレとかで判断できるのだが、残念なことに全く分からないでいる。

「んゝあえて言うなら両性？」

「マジで？」

「ねえお兄ちゃん、両性ってことはカエル？」

此処に一人馬鹿が居ました。

「僕が男でも女でもないってことだよアリシアちゃん」

「オ。マ？オ。ベ？」

「なあ……流星君に聞きたいんだけど、この歳でオカ。とかオナ。とか知ってるってかなり問題あるよね……君達教育方針について小1時間聞いただいたいんだけどね僕は……」

レッドは顔が笑っているが、背後にあるオーラからは威圧感を感じる。

これでもかなりの修羅場をくぐり抜けてきた俺だが、ここまでハッキリとした威圧感を出す奴はあまり多くない。

やはり、両性の方に。カマ。ナベは禁句だったようだ。

「まっ、冗談だよ。」

僕の心がこんなに狭いわけじゃないか。

それに僕は子供に暴力をふるほど欲求不満じゃないし、でもね流石の僕もオカ。とかオ。ベとかは傷付くな……」

最初は見えていたオーラは消え、代わりに周りの木材が浮いたのは目の錯覚だろう。

超能力者？

ふとそんな考えが頭に浮かび上がってくる。

魔導師……魔法があるぐらいだし超能力があつたとしてもおかしくない。俺は考える。

「そうだそうだ、八神兄弟は宿が無いからこの廃墟に来たんだよね？」

「うん！」

「そうだが……」

「じゃ家に泊まらないか？」

「おはよう」

「おはよ

「おはよう」

俺らは結果としてこの家に住むことになった。

第7話（前書き）

誠にすみませんでした

第7話

色々小競り合いが起き、最終的にこの廃墟は皆の共通財産となった。小競り合いというのはアリシアが「館主ってだれ？」の言葉から始まり、昔からこの廃墟に住んでいる一番古株のレッドが「常識的に僕でしょ？」と言った。

それに対しアリシアは「あ、そうか……」と納得したが俺はそのさも当たり前でしょ？発言に少しイラつときた。

不法滞在者が何を言うか……。

元を正せばレッドも俺らと同じ放浪の身だった筈であり、この屋敷の正式な所有者ではない。

なんつうか……その言動が少し気に入らなかった。

まあ、それだけだったんだけどな……。

しかし、この屋敷をもつと快適に暮らすべく俺らはレッドに使える部屋はないかと聞いたら「あ、それ無理だね、だって僕の置物とかぎっしりと詰まってるし、動かすのも色々めんどくさいし……あ、でも一緒に暮らしたいし僕と同じ部屋で良い？」とプライベートを完全に無視したことを言っただけだった。

せめて、「ごめんごめんすぐ片付けるから」ぐらいは言っただけで貰ったがこれはあくまで俺の希望なんでどうでもいい。

なんつうか……個人で部屋を独占してるのが気に入らなかったのだ。

我ながら思考がガキだと思うがな……

まあ、色々あって結果的に俺が屋敷の三割、アリシアが三割、レツドが四割ということで決めた。

我ながら少し傲慢だと思うが、こうでもしなきゃ生きてられませんでしたから。

少し屋敷を出て外の空気を吸うと、屋敷の煙り臭かった環境の影響か外の空気が美味しい感じた。

ついでなんで少し外に出て一人で散歩をしてみたいと思う。

俺が屋敷を出てから散歩がてらにフラフラと歩いていると、安全運転関係なしの黒い車が俺に直撃した。というかはねられたといったほうが正しい。

そして直撃した衝撃により俺は宙高くを舞い、地面に叩き付けられた。

かなりの衝撃だった俺はかなり頑丈に出来ているおかげで傷一つなく、代わりに俺をはねた車にへこみが出来ていた。しかしその車は止まることなく去って行った。

俺は立ち上がり、自分でもキモイぐらいの良い笑顔で、

「殺すか」

そう言つて俺は黒い車を追うため全力で走り出した。

私の名前はアリサ・バニングス家。

学校帰りではよくなのはとすずかの二人で一緒に帰っていたりするけど、今回はなのはが用事あるとのこととで久しぶりにすずかと一緒に歩いていたら、黒い車が急に停車し、中から怪しい男達が現れた。

男達は私達を囲み、口元にハンカチを押し付けてきた。

私達は暴れたが流石に子供では大人の力に勝てる筈もなく眠りにつきそうなるが……。

ボキッ！

私の耳元から腕が折れたような音が聞こえ、私の口元にあったハンカチが下に落ちた。

「私のアリサちゃんに手を出すなんて……その腕要らないよね？」

「おおおれの腕がアアアアアアッ！……！！！！！！」

どうやらさすが私が私を助けたようだが……なにこれ……。

確かにさすがは運動神経ばつぐんだがここまで力強いなんて私今まで知らなかった！

「さすが……アンタ……」

私がさすがを見るとさすがは虚の目になって、

「ごめんねアリサちゃん……私実はカツラなの……」

……………（。D。）ハッ？

え！？そこ？！

さすがが吸血鬼と言われるよりも凄まじい衝撃の事実には私は口をポカーンとさせている。

「でも私達は友達じゃない！」

例えさすががカツラを被ってたって構わない、少しどころじゃなく

驚いたけど……だってすずかと私は親友だから！

「アリサちゃん……ぜひ結婚前提でお付き合いお願いします」

「ごめんそれ無理」

Σ（□、 ガーン！

と分かりやすいジェスチャーをすずかはした。……すずか……私達
ずっと友達だからね……。

ドンー！！

固まっているすずかの後頭部を誰かが拳銃で撃ち抜いた。

すずかは目を見開きながらそのまま倒れ伏した。

「おい、とりあえずその死体になっている夜の一族の小娘とバー
ニングの娘を車の中に運んどけ、夜の一族の方は無理かもしれんが
死体は回収しておけ、バーニング家の方には身代金を要求するぞ」

そう言う男は銃を私の方へ向ける。

「私は大人しい子供と賢い子供が好きでね、うるさいガキは嫌いな
んだよ私は……もしかして手元が狂って君の手足を撃ち抜くかもし
れない」

この男がやっているのは完全な脅しだ。

男の冷酷な視線が突き刺さり、さっきまで平穏な空気の温度さに私
は吐き気をもようした。

隣に居る親友のすずかは地面に倒れ伏し、体からは大量な血が……。

血が出ていなかった。すずかは確かにこの男の銃で撃たれたはず。

「うう」

隣から唸り声が聞こえる。

紛れも無いすずかの声だ。

「すずか！」

私はすずかが生きていた事に私は心の底から喜んだ。

「嘘だろ……」

男は驚愕な顔をした。

「まだあれから一分も経ってないぞ………なんという再生能力だ………だが生きてるなら身代金でも要求するか？」

男がしばらく考えているとやっと納得する答えを出したのか顔を上げ

「親友が人質ならば夜の一族の小娘も手出しできんだろ………」

つまり、私を人質にとってすずかを従わせるといつつもらしい。

「よし、お前達コイツを運んでおけ。私は……」

「

P i p i p i ! !

男のポケットから電話の着信音が鳴る。

「誰だよこんな時に。」

はい、もしもし………しかし、今バニングス家と夜の一族を生け捕りしたところで……え？そうですか、了解しました。

……おい、おまえたちに後は任せた。私は少しばかり用事が出来たので失礼する。

ではな、リトルレディー」

そう言うと男は二台ある内の黒い車に乗り、その場から去って行った。

「では、二人とも車の中に入ってもらおう」

「痛い！」

少しでも抵抗しようとするが、こんなひ弱なレディーが体格の良い大人に敵うわけもなく、私は強引に手を引っ張り上げられてた。

「うるさい、黙らないと《自主規制》とか《自主規制》更には《放送禁止用語》するぞ！分かったか！」

ガクガクブルブル

(。A。)()()

「うは！少女の体暖け！そして柔らかい！

グヘヘ！このままだと手を出してロリコンになっちまいそうだぜ。ジュルリ……！」

すずかが気絶しているのをいいことに、すずかをベタベタ触る変態が居た。

私達は車に乗り込み男達は車を出した。

途中で誰かを弾いたらしく、強い衝撃が車内を襲い中が結構揺れた。後ろを見ると私達と同じ年ぐらいの子が倒れていた。あれは確実に死んだなと考えると運転主に怒りが込み上げてくるが、隣で私をペタペタ触ってくる目が危ない人の方が怖く、中々声を出せずにいた。むしろ身の危険を感じ、背筋が凍る思いをした。

すずかはあのダメージから回復しきっていないようで、目を回していて中々コミケルだった。

しかし、その横の奴がやばかった。

「うしうしうし！これに反応するということはすずか嬢は猫科か！ならもつと……ギャー！指が指が食われた！あ、だめ！そんなにチユルチユルと吸っちゃ……！あー！凄く快感！俺の猥褻物が凄くヤ・バ・イ……！」

すずかが今にも取って食われたそうですごく怖い！

ロリコンなんて滅びれば良いのに……。

第7・5話（前書き）

誠にすいませんでした。

第7・5話

全速 前進 D A

走って黒い車を追い掛けて行くと廃墟らしい場所の手前に止まり、中から降りてきたのは金髪少女の手を握り、嬉しそうにしている男と、気絶しているのか、男に抱えられている黒髪の少女がいた。

（つて、まんますずかじゃねえか……）

見覚えあるかと思ったらずかだった。

（つてことは金髪少女はアリサなわけか……なんつつテンプレ！）

なんつつテンプレだ！

これは俺にオリ主になれと言ってるのか。

（ここでさっそうと助けたら、多分アイツらにフラグ立つよな……めんどくさいのこの上ない）

ここで俺が見捨てれば恭也達があの人を助けに入るかもしれないと考えているが、同時に俺という存在によってこの世界に変化が起きていることは明白だ。

俺の取る行動によっては二人の生死が決まるかもしれない。

（はあ……見ちまったもんは仕方ないか……。助けに入らないと、どう世界に影響してくるか心配で心配でしょうがない。

これも選択肢の一つということで割り切りますかね！)

俺は相手に正体がばれないようにするため、たまたま売ってたウルト。マンの仮面を装備して、二人が連れてかれた建物に入っていた。

S i d e
ア リ サ

私は今黒服の男達に誘拐され、手足を縛られている。
隣には私と同じ誘拐されたはずがいるが、撃たれた衝撃により今
だ意識は回復しきっていない。
本来頭を撃たれたら即死であるはず。

しかし、すずかは銃弾を受けても死ぬことなく、ただクラクラと
頭を回しているだけである。
弾が非殺傷のゴム弾であったとしても、あの距離なら最低でも脳震
盪ぐらい起こる。

そうあくまで『常人』ならばの話。

ここまで考えて推測できることは……すずかは……

「本物の邪気眼使いか……」

時より片目を押さえ「アリサちゃん私から離れて！」とか凄く痛い
子に見えた。

両手両足に、なんかよく分からないルーン文字でびっしりと書かれ
てある包帯を、ぐるぐるに巻いた状態で登校した時は私もさすがに
心配したけど「これは、力の代償で、手足が少し吹き飛んだだけで
今治してるとこなんだよ」と笑顔で解説してくれたすずかの顔は一
生思い出に残るだろう。

ま、まさか本当なんて！

ごめんねずか、親友なのに信じてあげられなくて……。

私アリサ・バニングスは親友失格なのか……。

私はわたしはワタシハ……………。

頭の中が真っ白になっていく。

なにも考えたくない……。

私は……

「アリサちゃん！」

頑張って諦めないで！私はそんなことでアリサちゃんを嫌いになんてならないよ！（アリサ悩内 妄想とも言つ）「

「私は過ちを犯してしまった。」

私はずかを…信頼して上げられなかった。

私友達として最低だよね……」

「でも、今は私の言ってたこと信用してくれるんだよね？」

「そうね…あそこまで見たら信じる他ないじゃないの」

「なら、私はアリサちゃんを許すよ」

「え……？良いの？」

こんな親友を信じられなかった私を許してくれるの……？」

「私とアリサちゃんの絆は、こんなちゃっちゃい事で壊れるほど柔じやないでしょ？」

この二年間で築き上げてきた物は嘘じゃない。

だから私はアリサちゃんを許すよ」

「ありがとう……本当にありがとう……私は……！」

微鬱状態から、自己修復。

実際にすずかはそんなことを言っていないく、全てはアリサの脳内で起こったことである。

妄想といっても過言でないその想像力により、アリサは自分に自己暗示、自己修復（精神面）を可能にする。

この廃墟に入ってからなにやら熱い視線や、下衆的な笑みをしているものの中には《自主規制》に目茶苦茶引っ掛かる事を言っている者もいた。

「えゝ、まだ味見しちゃいけませんか？
いい加減俺も限界なんですが」

一人の男が私に覆いかぶさった。

嫌……

「屈辱写真も要るからな、好き勝手やつてもかまわんぞ」

嫌……！

「え？マジ！」「じゃ俺も！」「俺はその黒髪の子とやりたいな」
「このロリコンめが」「お前もそうだろうが」「はっ……！違いねえ」

「ハハハハハッ！！！！」

私に覆いかぶさった男はカチャカチャとベルトを外し、ごそごそとズボンを脱ぎはじめた。

[illegible]

私がこんな奴に純潔を奪われるなんて嫌だ！！

私は後退りするものの、男はニタニタした笑みを浮かべ、私に近づいてくる。

「ああ、大丈夫大丈夫、痛いのは最初だから……痛みなんて無くなつてすぐ気持ち良くなるから。」

「ウハWWW! 幼女最高WWW!」

男が私に手をかけるその瞬間、生暖かい何かが顔に掛かった。

「血！？」

顔を触り、拭い取ったのは赤々しい血だった。

「私のアリサちゃんに手をかけるなんて、一度ならず二度死んで、地獄の業火に焼かれ死ねばいいのに」

「すずか！」

いつの間に目が覚めていたのか、
 ずずかは欠伸をし、男に打ち込ん

だ拳を引き抜いた。

その手は赤く染まっており、人を殺したというのを物語っていた。

「アリサちゃん、今からアリサちゃんの純潔を奪い取ろうとした奴らを皆殺しにするからちょっとグロかも」

ずずかは笑いながらそう言った。

「ずずか…あんた人を殺して平気なの?!」

「平気じゃない……けどアリサちゃんが居るいじょう私は引き下がれない。私だつて躊躇するよ!けどアレは人なんかじゃない。アレは人じゃない別の何かなんだ……。私はアリサちゃんを守る!」

「クククククツ!!ハハハハハハッ!!」

どこからともかく笑い声が聞こえる。

「誰だ!」

男の内の一人が言った。

「あゝ腹いてゝ。なんつう原作ブレイク。もうこりゃ個人能力以外変化ありだな」

げんさくブレイク?なにそれ?
っていうか居るなら助けなさいよ!

「姿を現せ!」

「へいへい」

物影から現れたのは私達とあまり背丈の変わらない子だった。ウ。
トラマンのお面被ってるけど。

「ちっ！ガキか。

てめえそこから動くなよ」

「いやはや、ここまで三下ゼリフの合う奴と会ったの久しぶりだな」

クククツと笑う子だけあり、とても不気味に思えた。

「死ね！」

ドン！！

銃声が鳴り響き、沈黙が場を制した。

「あら不思議、銃撃つタイミングに合わせて振れば切れるじゃないか」

その子の手にはいつの間にか二振りの刀があり、銃を撃った男はその子供が銃弾を『切った』という事実に対しうろたえていた。

「そんな驚くなよ」。

こんなこと出来る奴ぐらい普通に居るだろ？世界は広いようで狭いからな、意外に身近に居るんじゃない？」

居ないわよ！と言いたいところだが、実際お伽話にしか出てこない

と思つてた存在がいるので案外否定出来なideいた。

すずかの方を見ると仮面の子を凝視していた。

「まさかあれは……………」

と意味ありげに言つたもんだから、私は興味本意ですずかに尋ねようとした。

「ま、それはとりあえず……………」

仮面の子が構えをとつたその瞬間、空間が揺らぐそんな感じがした。

そのおかげか私達を誘拐した男達は全員警戒体制に入つた。

「人質取られる前に終わらせる……………!!……………たぶん!」

カッコイイこと言っているが、最後の台詞のせいでしまらない。

「動くな!それ以上動いたら…ガッ!」

私を人質に取ろうとした男は突然膝を着き、白目を剥いていた。

いや…その男だけでなく私達と仮面の子を除く全員が気絶していた。

そしていつの間にか私を縛り付けていた縄が断ち切られていてことに驚いた。

なお、すずかは意味なしということと拘束されていなかった。

「ひゅー」伸びた伸びた」

「なによアンタ！

居るなら早く助けなさいよ！」

「いや別に、少女二人が危険に陥るまで傍観しようと考えてたんだけどな……予想外の展開に笑っちゃってたな。

ハハハハッ！出る他なかったわけだ」

「じゃ、あんたが笑うまで助ける気はなかった。そういうことね……」

助けてくれたことには感謝するけど……納得できるか！

「違うぞ幼女。

死にそうになったら出てくるわけだから、別に笑ったから出て来た訳じゃない」

「幼女言うな！

あんただって私達と大して歳違わないでしょうが！なら私達がどれだけ心細かったか……うつ……」

怖かった……本当に恐かった……恐かったんだから！

「あゝ泣くな泣くな。

それと黒髪幼女よ……」

「なに？」

「そんなガン見されると、小心者として逃げ出したくなる心でいっ

ばいっばいになる」

「ごめんなさい……」

外からサイレンの音が聞こえる。

「警察も来ることだし、俺はこれで撤退させてもらっわ」

「あんた名前は!？」

「俺の名前はマイケル・ジャ○ソんだ」

彼はいつの間にか姿が消えていた。

「堂々と偽名を名乗るな!!! マイケル・ジャク○ン!!!」

その日一番に大声が出た言葉がこれだった

ピコーン！

「はっ…！」

「どうしたんだいアリシアちゃん」

「今お兄ちゃんがどこかでフラグ？を立てたのを感じた」

「うんうん。分かった分かった。アリシアちゃんしっかり掃除しようね。言い出しっぺなんだし」

「きゃー！！犯される誰か助けてー！！」

「やめて！それ凄く近所迷惑だから！」

掃除を投げだしたいアリシアと真面目に取り組もうとしているレッドの今日一日の出来事だった。

「封印！」

なのははジュエルシードの暴走を鎮め、ジュエルシードである青い宝石がレイジングハートに吸い込まれていく。

「お疲れなのは」

「うん！ありがとうねユーノ君」

バリアジャケットを解除し、家路に帰りながらユーノとこれからの行動に関しての話をしていて、なのははとあるジュエルシード事件のことを思い出していた。

「ねえねえユーノ君」

「なになのは？」

「あの変態さんの顔見てないんだよね………？」

「うつ……！大丈夫！僕がなのは絶対守るから！」

「うん！」

ピローン♪

ユーノがなのはにフラグが立ちました。

なのはのユーノへの好感度。

《1↓10Up→ 評価 友達》

頑張れユーノ、なのはが恋愛対象にしてくれるまで後490だ。

第8話

波瀾万丈。

これが俺の浪漫。

「アリシア」

「ん？なにお兄ちゃん」

今現在にアリシアと一緒に鯛焼きを食べている。

「自分の妹に会ってみようとは思わんか？」

「妹って……私妹なんて……あ、けど、母さんが再婚してれば居るかもしれないね」

「ま、居ると仮定して会いたいのか？」

「ん、会ってみたいけどその子が幸せなら無理に会いたいとは思わないし、なにより子供が居るってことは母さんは幸せってことなんじゃないの？」

「会いたいなら合わせてやるよ」

「え？けど……」

うじうじしているアリシアを見て、どうも判断が遅そうなんで連行することにした。

「うじうじと、めんどくさい。
連行だ！」

「妹居るんだ!？」

そのままアリシアは俺に引っ張られるようにして連行されていった。

「居た」

魔力を探知し、探すこと1時間。
金髪ツインテールと此処ではひじょーに目立つ人物を発見。

「うわぁー私とそっくりだね」

アリシアと俺はフェイトからちょうど死界になる場所から観察している。

（フェイトはアリシアのクローンだし、中身はともかく外見が同じなのは当たり前か……）

「お兄ちゃん……私の妹ホントにいたんだね。」

……ならもう母さんの所に戻る必要ないね。今行っても混乱するだけだろうし、子供が居るってことは私のことは吹っ切れたんだと思うから」

「嫌なもの見せちまったか……？」

「ううん。これでやっと心置きなくお兄ちゃんとずっと一緒に居られるよ」

あれ？前より決意が固くなってないか？

「お兄ちゃん大好き」

俺に抱き着くアリシアの行動を反射的に避けてしまった。

「何故避けるし！」

避けられたことにアリシアは頬を膨らませ怒っていた。

「すまんすまん。」

あ、観察対象Fがとうとう動き出したぞ」

「ううゝ！一度ぐらいは大人の階段昇ろつよお兄ちゃん」

「危険な発言禁止！後を追ってくぞ」

「はい」

しばらく見ていると突然フェイトが屈み何かを拾った。

「百円だね」

「百円だな」

そして拾い上げた百円を川に向けスローインした。

「「ええゝ！」「」

「どうか、お母さんが昔のように優しくなりますように」

百円を投げたことにも驚いたが……ああゝそういえばフェイトって
プレシアに虐待受けてたんだっけ。

忘れてたよ。おい……。

「勿体ない！なんで投げ込むかな！？」

どうやら聞こえてたのは俺だけだったようだ。

「あ、アルフどうだった？」

と背丈の高いお姉さん？ことアルフが現れた。

「いや〜見つからないもんだね。

やっぱり発動前じゃ魔力は感知出来ないし、効率悪いわ。

ごめんねフェイト……私が不甲斐ばかりにフェイトにばかり苦勞かけて……」

「アルフのせいじゃないよ。

ジュエルシードが見つからないのは私が力不足だから……ごめんねアルフ……こんな駄目なご主人様で……」

と会話が続けている。

最初は賑やかだった広場も、何故かフェイトを中心に人が離れており、中にはフェイトにドン引きしている人もいた

フェイトの御主人様発言が、なぞの固有結界を作り出していた。

「あの人だれ？」

「フェイトの使い魔だつてさ」

「ふ〜ん……つて！お兄ちゃんばからずるい！私全然聞こえないよ！」

「こら静かにしなさい。

ったあく仕方ない、もっと近近づいてやるよ」

カサカサ！

「これで聞こえるだろ」

「うん！ありがとうお兄ちゃん！」

アリシアも聞こえる範囲に来たことだし、フェイトとアルフの会話に耳を傾けるとしよう。

「ならアルフもこれを川に向かって投げてみようか」

「フェイトそれを投げてどうするんだい？」

フェイトがポケットから取り出したのは十円と百円だった。

「ん？この世界では川に向かってお金を投げると願いが叶うんだって。だからアルフも試しにやってみるといいよ」

ちげー！！

そもそも川に投げ込むな！

ああゝ勿体ねゝ。

「へえゝ変わった風習だね。

なら私は御主人様の願いが叶うようお願いをしようかね……」

そう言うときアルフはミッド貨幣を川に投げ込んだ。

おい!!

「おおゝ三ポチャだ」

金で遊ぶな!

「あ、駄目だよアルフ。願を叶えてくれるのはあくまでこの世界の硬貨だけだから」

「ああゝそうだった……でも私この世界の硬貨なんて持ってないし……」

「はい、アルフ」

フェイトがアルフに渡した物は百円。

「へえゝこれがこの世界のお金ねえ……フェイトはこれをどうやって入手したんだい？」

あの鬼婆がこんなことしてくれる筈ないし……」

「お母さんのこと酷く言っちゃ駄目だよアルフ。

これはね、地面にたまたま落つこちてたから拾ったんだよ」

(拾えるもんなんかい!この世界のお金は!)

アルフは心の中でそう突っ込んだ。

「そりゃ良かったね……」

アルフは優しいな笑みでフェイトに微笑んだ。

そして、アルフは手元にある百円を川に投げ込んだ。

(どうかフェイトが幸せになりますように……)

その頃流星達は……。

「んゝ実は家族関係は良好じゃなかったってオチ……？」

アリシアの今にも泣きそうな顔に俺は心が痛む。

「ハハハッ……。とんだ勘違いだったね……。やっぱり一度ぐらいは母さんに会いに行けばよかったな……。私のこと引きづってたんだ。」

母さん悪くないのに……。ごめんね母さん私会いに行けなくて……」

「なら会いに行くか……？」

その問いにアリシアは無言で首を横に振った。

「だって無理だよ……。『死者蘇生』の実体験者なんて人間管理局の人間が欲しがらない訳ないでしょ……？」

「……………ならせめて、別人として『八神アリシア』として妹に接してやればどうだ？それぐらいなら管理局にもばれないだろ」

しばらくの沈黙。

アリシアは俯きながらもコクコクと首を振り

「分かったよ……。フェイトに会いに行く。けどまだ決心がつかないから保留ってことで良い……？」

「ああ」

その日フェイトとアルフが広場から離れるまでアリシアと一緒に見ていたが……………フェイト一度祖国に帰って、まず常識を学んでこい！

金でレールガンやるな！

一般人が居るところで空に飛ばうとするな！（なお、これはアルフによって阻止された）

魔法の練習したかったら結界張れ！

堂々とやるな！

（なお、これはアルフのつつさの判断のおかげか、あまり人目に付くことなく済んだ）

育児放棄ですかプレシアさん……………。

第9話

「何故こうなった……」

現在アリシアとなのはが空中で戦闘中。

フェレット状態のユーノは俺に警戒している。

何故アリシアがなのはと戦うことになったかというところ……

「私達もジュエルシードを探そう！」

「何故に……？」

「うん！やっぱりフェイト一人に母さんの探し物をさせるのは、姉としての威厳が許せんのです！」

「ああ別に……と言ってやりたいのは山々だが、イレギュラーはこれ以上起こしたくないのが本音だ。

俺らが何もしなければハッピーエンドは揺るがない。

それでも手を出すならそれ相応の覚悟は持つておけアリシア……。」

「お兄ちゃんはいったい何を知ってるの……？」

イレギュラーって何！？

ハッピーエンドってなんかゲームみたいな言い方だね……。

なんか現実を見てないみたいに感じる……お兄ちゃんは何を見てるの……？」

「……流れだな……。」

「流れ……？」

「物事は童話のストーリーのように流れで構築されている。

インスピレーション。

作者が感じ取る出来事を空想から現実に変えていく。

一部では空想から現実に投影し、出来上がる世界などが存在する……。
どんな世界にも流れ……ストーリーがあり、出来上がった作品のよう
に話が存在する」

「?」

アリシアの方を見てみると首を傾げている。

「あえていうなら……魔法なんて面白い物がありながら、その世界
が普通であるはずがない。」

そもそも……

いや、やめておこつ」

「お兄ちゃんの話し難し過ぎだよ……」

「気にするな……ただの戯言とでもおもっておけ……。
で?アリシアこれでいいか?」

「ううゝ!」

「はぁ……なら手伝えば良さ……」

「うん!」

そして、俺とアリシアはジュエルシードを探すべく町を歩くのだっ
た。

ん?ジュエルシードの場所は大体知ってるけどアリシアには教えて
いない。

理由としては、アリシアの歩く道がどのように『原作』に作用されるか見てみたいからだったりする。

俺は余程のことが起こらない限り、手を出さないと決めている。

見たいのはアリシアの【物語】だからな……

「！ジュエルシードの反応だ！」

そう言うとも目散にすずか亭に向かって行っただ。

猫かよ……

「『ボルトライトニング』セッアップ！」

【レディ！】

バリアジャケットを覆い、巨大猫に向かって飛翔する。

「先手必勝！フォトンランサー！」

巨大猫は特に避けるそぶりも見せず、アリシアのフォトンランサーの直撃を受けた。

「ぬうニヤあゝゝ！！！」

アリシアのフォトンランサーの直撃を受け、猫は目を回しながら倒れた。

「ごめんね猫さん……」

そうアリシアは謝り、ジュエルシールドを封印しようとする矢先……

「！魔力反応A A Aクラスの魔導師がこっちに来る」

高速移動でこちらに向かってきている。

「封印する時間がない……なら！」

魔法陣を展開し、

「撃ち落とすのみ！」

背後に現れた魔力光と同じ色をした砲台からフォトンランサーが放たれる。

「にゃ！にゃ！にゃ！？」

紙一重でフォトンランサーを避け、当たりそうになるものだけをプロテクション防ぎ、着実にアリシアに接近している。

距離が近付いたおかげか、アリシアでも認識出来るぐらいになっていた。

「ツインテールに白のバリアジャケットって……お兄ちゃんが言ってた子だよね……？」

「まあ、そうだな。」

けど、俺はもうとやかく言つつもりないから。
アリシアはアリシアの信じた道を進めば良さ」

「お兄ちゃんは手伝ってくれないの？」

「……稀になら手伝ってやるからそんな涙目で俺を見ないでくれ」

「うん！ありがとうお兄ちゃん！」

と会話している間に、

「いきなり攻撃は酷いと思うの！」

なのはがやって来た。

「いやゝだってね普通ミサイルが来たら撃ち落とすでしょ？」

「にゃ！私ミサイルじゃないよ！」

「私にとっては貴方もミサイルも大して変わらないけどね」

「酷い！」

「なのは落ち着いて」

フェレットがなだめる光景が中々にシユールだった。

「アリシアさっさと封印してやれよ……猫が可哀相になってくる」

「あ、そうだったそうだった」

アリシアは封印しに向かうが、

「あの、それはユーノ君の探し物なの。……だから」

「僕の名前はユーノ・スクライアといいます。」

それはジュエルシードというもので、とても危険なロストログリアなんです。

僕が落としてしまったから僕自身が集めないといけないんです。

そのジュエルシードをこちらに譲ってもらいませんか？」

図々しいよユーノ！

「お兄ちゃん……どうしよう……」

アリシアは迷っているようで俺に助けを求めてきた。

「アリシアお前なにしに来たんだよ……」。

フェイトのためにジュエルシードを集めに来たんじゃないのか？」

アリシアは姉としての意地？かはしらんがフェイトのために集めているのは明白だ。

姉として頼れるところでも見せたいだろう。

その実行者がなにしに来たんやら……」。

「……ごめんね。」

これを譲る気は気持ち一割もない！」

ピシッとアリシアは言い張った。

「なっ！」

それに驚くユーノ。

この宣言はあるいみ敵対宣言とも取れるため、ユーノはこの時アリシアを改めて敵として認識した。

「なんで!？」

なのはがアリシアに問う。

「全く親孝行も出来ず、妹とは会うことがなかったこんな私が、ゆいつ家族にしてあげるたった一つのことだから……。
例えば貴方達が立ち塞がろうとも……私は……。」

これだけは譲れない！」

【サンバーモード】

デバイスから電子音が聞こえる。

アリシアは杖だったデバイスを両手剣に変化させた。

「なんで!なんで……」

「なのは……」

「戦わないならデバイスを下げて……でないと戦わないといけないから……」

なのはのデバイスを握る手に力がこもる。

「まず話を聞かせて!いきなり戦いなんて悲しすぎるよ!」

「…………ごめんね…………」

デバイスを持つ少女達が対峙する。

己の決意はこの手に…………今二人の少女の戦いは始まったばかりなのだから…………。

「俺空気乙！」

「君の相手は僕が務める！」

こちらも、暇人VSフェレットの戦いがはじまる。

.....生温いけど.....。

第10話

「行くよ！レイジングハート！」

【イエス、マスター】

「それは宣戦布告と受けるよ！行くよ！ボルトライティング」

【イエスサー】

「アクセルシューターシュート！」

まず、先制を取ったのはレイジングハートのマスターである高町なのは。

なのはの放った魔法『アクセルシューター』アリシアへ変則移動しながら近付いていく。

「ハッ！」

アリシアはボルトライティングを一振り。

アクセルシューターはボルトライティングの魔力刃によって掻き消された。

【ソニック・ムーブ】

なのはの視界からアリシアの移動魔法『ソニック・ムーブ』により
なのははアリシアの姿を見失った。

「動かないでね」

いつの間にやらアリシアはなのはの背後にいた。

アリシアはボルトライトニングの魔力刃を首に突き付けて、動かぬ
よう警告した。

「ん〜やつばまだまだ経験不足かな。
それじゃ宝の持ち腐れだよ」

ニツコリとアリシアがなのはに笑いかける。

「貴方はまだ幼い。
色々と希望が詰まってるんだから、焦らず頑張っていけば良いよ。
……良いよね成長期って……。」

「にゃ!」

何故かアリシアの最後の言葉たけやけに涙声だった。

「どうして泣いてるの……?」

なのはが後ろを振り返ろうと首を動かすと……

「にゃっ!」

さっきからアリシアが展開していた魔力刃が見事になのはの首に
突き刺さった。

「同情するなら胸を頂戴…… ってももの見事に首に刺さってるぅ！
大丈夫！？」

なのはの首に刺さっていた魔力刃はアリシアが消失させた。

「大丈夫じゃないの……」

なのはは意識を失い地面に墜落していく。

「よつと」

それをアリシアは受け止めた。

「非殺傷で良かった良かった。」

危うく首ちょん切るところだった」

ふう……。

アリシアは額から出た冷汗を拭い取った。

「さて、お兄ちゃんはどうしてるかな」

アリシアはなのはを抱えながら流星の『気配』を感じる所に向かつて行った。

「おつとつと。」

ジュエルシードのこと忘れるところだった」

Uターンをして、ジュエルシードを見つけ封印した。

「しかし……6才で不老とか嫌すぎる」

アリシアはなのはと自分を見比べて溜息をついた。

「これじゃ何時になってもお兄ちゃんが襲ってこないじゃんか！」

S i d e 八神流星

ざわっ！

一瞬俺の見に危険を感じた。

まあ、それはともかく。

「転移で俺をあいつらから離して何をする気だ」

「君さつきから隙がないんだけど……本当に魔力Eランク？」

おいコイツ勝手に人の魔力量計りやがったぞ！

「魔力量Eで、いかにも戦闘慣れして君はこの中で1番危険だ。だから、僕は君をなのはから離れた」

ほうほう中々洞察力あるじゃないか。
少し見直したぞユーノ。

でも……分かってやってるってことは……俺に倒されれ覚悟がある
ってことだよな……。

「知ってるか……Eの後にXが付くと某ゲームでは規格外扱いにな
るんだぜ」

「えっ？それと今の君の状況は何か関係あるの……？」

「最強も最弱もEから始まる……だから何？と突っ込まれたら困る
んだが……」

抑えていた魔力を少し解放した。

「こ、これは……！」

軽くAAAぐらいの魔力を解放してみれば、更にユーノの顔が強張
った。

「魔力反応0つまり……魔力総数E……」。

だが、俺は使えないわけじゃない……使わないだけだ。

圧倒的な火力で押し勝つのあまり好きじゃないんだよ俺は……本当
に殺るならもつとスムーズに行くだけだ。

魔力なんてものは、人の生命活動を止める上で絶対必要じゃないか
らな……。

それと魔力をお前らが固執してるだけに過ぎない……ただそれだけ
だ……」

俺は腰に挿してある雷電、紫電を手に取り、ユーノに対して構えを
取った。

「近距離型！それもAAAだなんて！？」

俺はちよつとばかりユーノに殺気を込め、紫電の刃先を向けて行った。

ユーノは俺の殺気にガタガタ身体を震わしている。

「戦いを知らずして……」。

ユーノは彼女に何を強要させようとしているか、考え直した方が良いぞ」

「……ッ！

なんで僕の名前を知ってるんですか！？」

あら俺、知らぬ間にユーノの名前言っちゃったよ。……でもまあいいか。

「そんな驚くか……？」

ユーノスクライアって結構有名人だぞ。

今じゃ行方不明扱いされてる天才少年。それがお前だろ……」

「！僕が行方不明になってることまで知ってるんですか！？」

色々驚いてるようだが、普通に調べれば分かるだろと思うのだが……。

「まあ、戯言はここまでで……やり合おうか。ユーノスクライア」

「っ……！」

紫電、雷電を抜刀させるため一度鞘に収める。

不意に一陣の風が巻き起こる。

凄いシリアスだ……。

「お兄ちゃん〜！」

とアリシアの声が聞こえてくる。

どうやら、なのはとの戦いはすぐ終わったようだ。

そこには、なのはを抱えたアリシアが、空を飛びながら俺の方に向かって来ている。

「なのは！〜！」

ユーノはなのはがアリシアに抱えられ、負けたことを察したのか、アリシアを睨み付けている。

「フェレットの癖に生意気な！」

そんな熱心に見ていいのはお兄ちゃんだけだよ！」

アリシア自重しろ。

「とりあえず、この子を治療してやってあげて」

「うん……」

ユーノが手をかざすと、しばらくしてなのはが目を覚ました。

「そうか私…負けちゃったんだ……」

なのはが起きたようなので、帰るとしよう。

「じゃ、帰るぞアリシア」

「うん！」

「待って！貴方の名前を教えて！」

貴方……貴方って俺じゃないっぽい……。

「私の名前は八神アリシア。
お兄ちゃんの妹だよ！」

「私は高町なのは。なのはって呼んで、貴方は？」

今度は俺のようだ。

「言いたくねえ言いたくねえよ」

「むっ！」

なのはは頬を膨らませていて、……中々に萌えます。

「あああだ」

「そんなふざけた名前普通有り得ないの！」

伝説の勇者とか、なめんなよ。

「じゃ、ゴンザレスで良いよ」

「え！？兄弟なのに苗字ないの！？そもそもゴンザレスってなに！」

「俺の愛称だぞ」

「あ、そうなんだ……」

意外に納得してくれて……俺凄く予想外だ。

「じゃ今度こそ帰るぞ……」

「待って下さい！」

今度はユーノに止められた。

「何故貴方達はジュエルシードを集めるんですか！？」

「それは言えないよ……」

凄く重苦しい空気を漂わせるといふ高等テクニック、いつの間に覚え込んだ。

「俺はオマケだ脇役だ」

そう言っただけで今度こそ飛び去った。

第11話

S i d e なのは

今、私の家族とアリサちゃんとすずかちゃんの家族で、一緒に温泉に家族旅行中なの。

私が温泉から上がり、アリサちゃんとすずかちゃんとお喋りしながら歩いていたら、額になにか模様がある人とあったの。

オタク臭がするの……。

そう思いながら、横を通り過ぎようとすると、ユーノ君から念波がきた。

（あの人、間違いなく誰かの使い魔だよ。

この館に僕ら以外の魔導師が居るって事だね。
狙われたら大変だ、気をつけてねなのは……）

それだけ言つとユーノ君からの念波が途切れた。誰からか妨害されているようだ。

（ふうん。

魔力量が異常だと思つたらあんた魔導師かい）

なんか念波で凄く威圧を掛けてきて……物凄く怖いけど負けません。

（貴方は使い魔さんのの？）

（は！それがどうしたっていうんだい）

私、ユーノ君、アリシアちゃん、ゴンザレス君。

更にもう使い魔さん……。

ユーノ君の言った通り魔導師がこの温泉に居るかはともかく、魔導師はもう一人居ることがわかりました。

（貴方達の目的はジュエルシードなの？）

ここは思い切って聞いてみることにしました。

（そうさ！だから、あんたみたいな餓鬼がしゃばることじゃないんだよ！）

これは決まった……。

（私も貴方もジュエルシードの探索者。

私はユーノ君の落とし物で、ユーノ君が探してるから私はジュエルシードを集める。

貴方の主人はなんでジュエルシードを集めるの？）

答えてくれるとは思ってないけど……私は聞きたい……その主人がなにを求めジュエルシードを集めているのか……。

私が負けたあの日、私は決意を胸にした。

絶対にジュエルシード全部集めて、ユーノに返すその決意を私は刻み付けた。

でも、それだけじゃなく、私はアリシアちゃんともっとお話をして、友達に成りたいと思った。

だから……私は。

ジュエルシードを全部集めて、アリシアちゃんとお話するの！

（そんなことばっか言っていると、後ろからアンタをガブっいくよ！）

情報の引き出し失敗。

その人は擦れ違い様にそう言った。

S i d e アリシア

ジュエルシード集めをしようと探すと、宿屋を発見。

近くから魔力を感じるので、たぶんなのはちゃんだと思う。

「温泉いいな。私も入りたいよ」

「無理無理。」

歳を偽装する術がない俺らじゃすぐ捕まるって。
入りたきゃ秘境か、宿の柵超えて入ってこい」

そう言われてガックリしたけど、こっそり入りにいれば問題ないということなので、後で入りに行きたいと思う。

勿論お兄ちゃんと一緒に入りたく、裸と裸の付き合いをしたいと私は思う。

昔は一緒によく入ってくれたけど、今じゃあんまり一緒に入ってくれない。

ここは是非とも一緒に温泉に入るべきではと思う。

少しお兄ちゃんに近付く。

相変わらず、良い香りがする……。

「はあはあ……お兄ちゃんも温泉入るよね……！」

私はお兄ちゃんの体臭を嗅いだせいか、少し興奮している。

ここは無理にでもコミュニケーション（裸の付き合い）を取るべきではない、お兄ちゃんを温泉に誘った。

「視姦で訴えるぞアリシア。

まあ、あれば入りたいな。

勿論入るのは別でな！

アリシアそんなじゃないに企んでるか丸分かりだぞ」

え？私はただ兄弟のコミュニケーション（裸の付き合いとか《自主規制》とか『放送禁止用語』とか）したいだけなのに……。
なんで、お兄ちゃんは受け入れてくれないの！

私お兄ちゃん無しじゃ生きてけないよ！

これは仕方ない……既成事実を作るしか……。

でも、この幼女ボディーでやって大丈夫なのか……？

この時ほど、私はこの不老を呪ったことはない……。

ある意味、女性が最も憧れているもの……つまり老けない状態にな
っている私だが……。

若すぎるのもどうだろうと思う。

もつと成長してから、不老になりたかった……そうすれば……グヘ
ヘ……、自動的に私に目がいくというわけだ。

それが理想だったんだけど……お兄ちゃんに「私成長しないの？」
と聞くと、お兄ちゃんは凄く難しい顔で「すまん」と私に謝ったの
は、かなり昔の出来事だ。

その日、あまりのショクツクで私お兄ちゃんを襲ったんだっけ？

残念ながらキスも出来ず、撃退されたんだっけ……。

「お兄ちゃんは私と入りたくないの……？」

「ああ
」

お兄ちゃんに凄い笑みで拒否された。

「……どうすれば一緒に入ってくれるの？」

「……お前が襲い掛かってこなきゃ良いよ」

え！？本当に！

私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ
私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ

私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ
私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ
私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ私自重しろ

……

「うん！分かった！温泉中はお兄ちゃんに襲い掛からないよ。
その代わり温泉中ベタベタしても良い？」

「節度を弁えてくれるならな」

やった！これで………おっとつと想像しただけで鼻血が……。

「やっぱ辞めていいか？」

ああー！聞こえない！聞こえない！

第12話

S i d e なのは

ジュエルシードの反応があつたのでユーノ君と一緒に向かったところ、ジュエルシードの所に魔導師の反応があるとユーノ君が言いました。

私頑張りたいと思います。

「え？アリシアちゃん！？」

見付けた先には、ちょっと大きくなったアリシアちゃんが居ました。

「君は誰……？」

「私だよ！高町なのはだよ！」

「ごめんなさい…分かりません。」

それと私の名前はフェイト・テストロッサです。

君は私と同じくジュエルシードを集めてるんですか……？」

どうやら人違いみたいです。

でもアリシアちゃんとフェイトちゃん双子みたいにうり二つです。

「うん、私も集めてるよ。」

……フェイトちゃんに妹か弟もしくはお兄ちゃんっていない？」

どうも気にかかるので聞いてみたいと思います。

「……アリシアって言葉には引っ掛かるけど……私に母さんとアルフ以外家族はいません」

どうやらいないようです。

しかし、どうやらアリシアちゃんのことには引っ掛かるようで、ゴンザレス君のことは知らないようです。

そういえばあの二人似てなかったな……。

「君の目的もジュエルシード。私の目的もジュエルシード。」

私は私の目的のため、君にこれを渡すわけにはいかない。ごめんね……」

「でもそれは危険な物なんです!」

「例えそうだとしても、これだけは譲れない!」

フェイトちゃんからとても強い意志を感じます。

「私の名前は高町なのは。貴方の名前は?」

「私の名前はフェイト・テストロッサ。ではジュエルシード頂いていきます!」

【プラズマ・ランサー】

【プロテクション】

私は魔力弾を防ぎ、距離を取ろうとしますが、

【ソニック・ムーブ】

私の視界からフェイトちゃんの姿が消えた。移動魔法便利過ぎなの……私も後で教えて貰おう。

「なのは後ろ！」

フェイトは背後から現れ、鎌を振るうがユーノの障壁により弾かれた。

「っ！良い使い魔だね」

「ユーノ君は使い魔じゃなくて、友達だよ！」

「さすがに2対1じゃ部が悪い……」

そういえば、使い魔らしきあの人はどうしたんだろ……？

「でも、諦められないから……私は……なのは達に負けない！」

「私もフェイトちゃんに負けないよ！」

【デイバイン】

「バスター……！」

【サンダー】

「スマッシュ……！」

ぶつかり合う閃光。最初は互角だったがフェイトの方が押され始め

ている。

そのままでは火力で勝てないと思い、フェイトは魔法を中断し、ソニック・ムーブで回避しようとするが、

「バインド!？」

そのままピンクの閃光の直撃を受け、フェイトは力なく落ちていく。

ユーノ君外道なの……。

なのははそう思った。

「よつと」

いつの間にやら誰かがフェイトを抱えていました。

「おいおい、あのままコイツ自由落下してたら確実に死んでたぞ」

ゴンザレス君でした。

「ふえ!？ゴンザレス君!？」

私はゴンザレス君がここにいたことに驚きました。

「おいおい、アリシアがコレ探してるの知ってんだろ？
なら、脇役の俺がいてもおかしくないだろ？」

「ゴンザレス君アリシアちゃんは？」

「はあ……アイツなら今頃気絶してんじゃねえ。
むしろ俺が気絶させてきた」

「ゴンザレス君……フェイトちゃんとアリシアちゃんって姉妹？」

「さあな……それは本人にでも確認とつみりやどうだ？
ちようどここにも居る訳だし、聞いてみりゃいいだろ」

「知らないだつて……」

「ふうん。じゃそのジュエルシード回収させて貰うぞ」

そう言うとゴンザレス君はフェイトちゃんを抱えながら飛んだ。

「にゃ！？ゴンザレス君も魔導師なの！？」

てつきり、アリシアちゃんに付き添ってるだけの人かと思ってたの。

「さあな……魔導師の定義が分からんからなんとも返しがたい。
フェイト……もう飛べるか？」

「／／／うん」

フェイトはお姫様抱っこから解放されました。

凄く……羨ましいの……。

「なのは気をつけて！」

彼からは魔導師Aランク並の魔力反応を感じる！」

「さて、アホの尻拭いのためそのジュエルシード回収させてもらう。もし邪魔するのであれば……帰れる程度にぼこる」

何気にゴンザレス君優しいの。

「でも、譲れないから！」

【ディバイン】

「バスター!!」

プス……。

私の収縮した魔力が突然霧散し、プログラムが掻き消された。そう、撃前に……。

「えっ!?!」

私は驚いた。

今までこんなことなかったのに。

再度、魔力を込めるが……

プス……。

魔力が集まらない……! !

まるで何かに妨害されてるみたい……。

「なのは！これはたぶん相手のレアスキルだよ！気をつけて！」

気をつけてってどうすればいいの！？

アクセルシューターもディバインバスターもそもそも魔力が集まらないとなにも出来ないよ。

「っ！バインド！」

ユーノ君がバインドで相手の動きを止めようとしますが。

「なっ！？」

バインドはまるで『巻き戻された』みたいに姿形を失っていきました。

「遊びは終了。……達磨製作……」

ゴンザレス君が私の前まで来て、両手にある、刀のような形をしているデバイスを振り下ろした。

と、共に激痛。

にや！！！！凄く痛いの！！

まるで、手足が切り落とされた、そんな感じがするの。

「やり過ぎたか……？」

痛いの痛いの飛んでげー（棒読み）

凄い棒読みなの……。

手足が痛く、身体は動かないけど、リンカーコアは無事なので飛んでられます。

「なのは！今治療を……」

ユーノ君が治療してくれるおかげか、痛みが引いてきました。

「え？まだやるの……」

ゴンザレス君は良い笑顔でそう言った。

あらゆる意味でプレッシャーが凄いの……！

これ以上やったらもって酷いめあわされそうなの……。

「ゴンザレス……さすがにやり過ぎだと思っよ」

フェイトちゃんもって言ってやって！

「……ま、あれだ。」

そこにいるやつらの非殺傷の砲撃と大して変わらん。痛み的にはな……」

私の砲撃ってあんなに痛いのか？

「確かにそうかも……」

ガン！！

「クククッ……さあ、ジユエルシード渡して貰おうか……」

「貴方達はこれがどんなに危険な物か知ってるんですか!？」

「危険……危険ねえ……こんなもんが危険物だったら……俺はどんな大罪人だろうな……」

「貴方は何を言って……」

「なに…戯れ言だ。
では回収しますかね……」

ゴンザレス君が触れた瞬間ジユエルシードから目を覆わんばかりの光が夜空を照らした。

それと同時に、次元が揺れたような違和感が私を襲った。

「まずい……次元震だ!」

ユーノ君が何か叫びました。

「次元震ってなに?」

「世界規模の大地震。

下手すればその世界が滅ぶぐらいの災害が起こる。
つまり世界存亡の危機……」

ユーノ君の代わりにフェイトちゃんが答えてくれました。

「ええー!!」

嘘っ！地球無くなっちゃうの!？」

「それはゴンザレスしだい……」

ゴンザレス君の方を見ると、凄く悪そうな笑みで、ジュエルシードを片手で握ってました。

ゴンザレス君ならどうにでも出来そうな気がしてきました。

「ああ〜めんで〜！フラグ立てたらどうしてくれるんじやおんどりや!！」

このストレスをこのジュエルシードに込めて……制限解除……《時間制御》フル操作！

どうなるか分かんがぶっ飛べ!！」

ゴンザレス君、色々とストレスを抱えているみたいなの。

「ハハハハハハハッ!！」

戻れ戻れ〜どこまで戻れ〜、原子の果てまで!！」

すると、ジュエルシードから光が収まりました。

「……あれ？ジュエルシードは……?」

……ジュエルシード封印!！」

そのいかにも封印出来ました〜。という顔しても一部始終見ていた私達から言えば……もう遅いと思うの……

「あの……ジュエルシードはどこ行ったんですか……?」

「えっ……？……封印したぞ……」

さっきの間は凄く怪しいです……。

「それなら良かったです……」

お、意外にもユーノ君が引き下がった。

てっきり私は、もっと食いつくと思ってたの。

そして、さっきの間のことについて突っ込もうも……

「なのは帰ろ……」

ユーノ君が私に言いました。

「うん」

そして私はちらりとフェイトの方を向きました。

「ごめんねフェイトちゃん。

私の砲撃あんなに痛いんだってこと知らなかったよ。

だからごめんなさい……でも……譲れないから。

だから私は何度でもフェイトちゃんとぶつかり合うことになっちゃ
うけど……何時かきつと友達になろうよ」

フェイトちゃんは迷った顔をしてから私に向き直り、真剣な眼差し
で言った。

「私は敵ですよ……そんな相手に、なのはは友達になろうと何故言
えるの……？」

「それは、フェイトちゃんが寂しそうな目をしてるからだよ」

キョトンとした顔で、フェイトちゃんが可愛いです。

「私は……」

フェイトちゃんはどうか悩んでるみたいなの。

今日は色々ありすぎたから整理が出来ないんだろうな。

「フェイトちゃん返事は次に会ってから聞くよ。じゃあね！」

答えは次会ってからにしようと思えます。

第13話

S i d e 流星

やっと未来の魔王様が立ち去ってくれた。そしてフェイトはこちらに話し掛けたいのかチラチラと見てくる。

ひじょーにスルーしたいんだが……。

ま、立ち去ればいいか……。

そして、俺はアリシアが気絶してるであろう場所に向けて足を進めた。

「あの！」

振り返りたくねえ。

俺は立ち止まることなく足を進めて行つた。

「今日はありがとうございました！」

別にお礼言われることでもないと思うけど……。
むしろこっちがごめんなさいだ。まったく……。

ああゝ畜生。

ストレスばっか溜まるな。

アリシア虐めてもつままないし……むしろ喜ぶし……何時からあん

な変態になっただんたろうなあゝ。

S i d e フェイト

ゴンザレスを見てからなんかムラムラします。

私おかしくなっちゃったのかな？今までこんなことなかったのに……

……は！まさかこれが恋！私ゴンザレスに一目惚れしちゃったのかな！

そういえば、なのはに倒されて気が付いたら、いつの間にかゴンザレスにお姫様抱っこされてたな……。

そして顔を覗き込まれたんだっけ……。黒髪にまるで吸い込まれそうになる金色の瞳……。思い出すと顔が赤くなります。

でも……。

「流石にゴンザレスはないと思います……」

ネーミング的な意味で……。

「でも、アレは凄かったな……」

なのはが撃つデイベインバスターを不発させたり、アクセルシューターを展開させなかったり……。まるで相手の魔力を操ってるみたいだった。

それになんだっけダルマセイサク？

超高速のあの剣技、一瞬にして両手両足にダメージを与えたあの速度もはや達人の領域だった。

ゴンザレスっていったい何者なんだろ……。

S i d e アリシア

ああ〜お兄ちゃんと結婚したいな。

夫婦の営みもしたいな。

お兄ちゃんのパンツが欲しいな。

色々と想像は膨らむけど、事実は悲しいものだよ〜。

「お兄ちゃん〜！どこに居るの〜！？お兄ちゃん〜！お願いだから出て来てよ〜！」

全く反応がありません。

近くにいないのだろうか？

いや……お兄ちゃんが近くにいてもスルーするよねきっと……。

目が覚めたらお兄ちゃんがいなかったのは、精神的にダメージがかかった。

なんかイライラします。

特に胸がでかかったり、背が高かったり……スタイル良い人を見るとなんか無意識の内に殺意が芽生えます。

途中赤髪のスタイル抜群の人がお兄ちゃんを睨んでたのでついつい気絶させちゃったってへ

その後、お兄ちゃんが溜息ついてどこかに行こうと飛んでいったので、私も慌てて追っていかうしたらお兄ちゃんに止められました。

なんでも嫌な予感がするとのこと、私に追ってくるなどのこと。

しかし、私に『待つ』という選択肢が存在しないため、意地でもついていかうすると気絶させられちゃいました。

そして最初に戻るわけだよ。

今現在お兄ちゃんを探索するため、あっちこっちと動き回っています。

ついでに気絶した赤髪の人は放置してきました。

魔力探知を行うと、こちらに誰かが近付いてくることが分かります。

お兄ちゃんだ！

「とりあえず用は済んだ。
帰るとするか……」

え？温泉入んないの？！

「お兄ちゃん！温泉は！？」

「ああ……そういえば此処はそういうところだったな……忘れてた」

全く入る気がなかったようです。

「じゃ、宿屋にこっそり入りに行こ？」

「かなり犯罪してるよな俺ら。

まあ、その提案したの俺だけど……。

ん、じゃ、行きますかね。」

あ、もちろん入るとこ別でな」

チツ！

でも、フフフフツ……。

ああ、温泉楽しみだな」

Side 流星

温泉になんて入ったの何年ぶりだろ……。
そう黄昏れていると……。

「ハアハア……！お兄ちゃん背中流しに来たよ！」

来たよコイツ……予想してたんだがな。

俺はコイツが自重する術を知らない。

むしろこれが正常体なのではと思っている。

取り合うのが面倒臭いので、スルーすることにした。

「ハアハア……反応が薄いな。

私が一緒に入って……ハアハア……お兄ちゃんの股……ハアハア……探つてあげようか？」

これを堂々とやろうとするとはもうアリシア駄目かもしれない。

「女湯に帰れ」

それだけ言っても強制力が足りないのか、アリシアはトテトテとこちらに歩いてくる。

「ハアハア……そのリボルバーいい加減……ハアハア……ホルスに収めようとしなない？」

アリシアの顔を見れば目が目茶苦茶充血してるうえに、吐息がここまで聞こえるぐらい煩い。

そして……アリシアの行動がヤバそうである。

え？なにコイツ《自主規制》なことしようとするの。

「お兄ちゃん…身体のはてりが収まらない……お兄ちゃんお願い…私に慈悲を……！」

仕方ないので近くにあった冷水をぶっかけてやった。

「ああー！じゅべたい！！！」

そう言うつと温泉へ一直線で走って行った。

「はあー極楽極楽」。

更に私の中に入れてくると、もっと温かくなるんだけど……」

もう……嫌だ……。

「お兄ちゃん。温泉の中でタオルを腰に巻くのルール違反だと思うよ」

ザバア！

「もう出るわ」

心と身体を癒すために温泉に入ったのに、これじゃ意味ねえよ。

「お兄ちゃん待って！せめてその腰の布とってアレの雄姿の確認だけでも……！」

アリシアは一度精神科に行った方がいいかもしれん。

しかし今日は色々と疲れた。

アリシアがアルフを気絶させたおかげか、俺が原作通りフェイトが手に入れるであろうジュエルシードを渡そうとして、力の加減を間違っただけでジュエルシードを消し飛ばしたりと散々だった。

今思えば、俺じゃないんじゃないかねえかと後悔するばかりである。あの時はあまり冷静なく判断力にかけていたいたのが原因かもしれない。

まあいいか。

一度ぐらいの問題ぐらいなら大したことにならないだろう。

これからミスしなきゃいいわけだし……俺からは原作には絶対関わらんぞ！

原作とか面倒臭い。

もし、間違っただけで原作通り管理局にあつたら俺は……どうすればいい……。

過去に俺は人を殺さずきた……それは償いきれない罪罰だ。もし管理局に会ったら……どうすればいい……

「今日は久々の鬱だな」

溜息をして自分が何をやってきたのかを振り返ってみた。

……さんさんの結果だけだった……。

そうとしか言えない俺は最低だと思う。

「お兄ちゃん〜!!」

アリシアが俺を呼ぶ。

まあ、アリシアが居るかぎり管理局からは完全に逃げられない。

幸い誰も俺の存在に気付いていないのが救いかもしれない。

波乱は好きだが……『雷光』が必要な状況は避けたい。

「お兄ちゃん……ハアハア……！」

ねえ良い？ねえいい！？ねえ取っちゃっていいよね腰巻きタオル！」

そう言つてアリシアは、俺の背中に全く成長しない胸を押し付けながら腰にあるタオルを取ろうと手を伸ばす。

「ハアハア……ハアハア……！」

アリシアの手が俺のタオルに伸び、掴もうとしたところを俺は背負い投げした。

「せい！」

「なんと!？」

見事に投げ技が決まりアリシアは目を回して気絶した。

「今の内に着替えておくか……」

俺は気絶しているアリシアを放置して行きたがったが、流石にこれが原因で性犯罪の被害者になるのは勘弁願いたいので仕方なく一緒に脱衣所まで運んでおいた。

あの森の中の時は人払いが敷いてあったのでアリシアを放置しておいたが、今は使っていないのでさっさと退場したい。

気絶させたのはいいもののこの全裸アリシア…どうやって服を着させよう……。

俺にやれと……？

いや無理だろ。

だって服は女性湯にあるんだぞ、俺に行けと。

外見は問題ないかもしれないが、中身はいい年した高齢者だぞ。そんな俺にプライド碎いて行けと！

はぁ……。

「ボルト・ライティング。バリアジャケットを形成してくれ」

【イエス】

最終的に俺が気絶したアリシアを背負いながら帰ることになった。

その後、目が覚めたアリシアはよだれまみれで更に息が目茶苦茶荒かった。

更に新しい服を催促され、デートじみたことをするはめに

第14話

Side なのは

私は授業と両立してマルチマスクで魔法を練習しています。

アクセルシューターで相手の動きを限定させてとっさにバイント、そして最後にディバインバスターが必勝コンボですが、現実でそう上手くいくはずもなくアクセルシューターは迎撃され上手くいきません。

ディバインバスターはチャージ時間が長いためその前に距離詰められてしまいます。なので今ディバインバスターのチャージ時間を短縮するため創意工夫中です。

レイジングハートにダミーを出してもらい総合練習を試みたいと思います。

【ディバイン】

「バスター!!」

ダミーを撃ち抜き、新たにダミーが現れます。

今練習していることはディバインバスターのより良い効率化とチャージ短縮。

発射まで1秒弱。

前と比べ随分ディバインバスターを撃つ速度が早くなっていますが、やっぱりどうしても威力の方が若干落ちてしまいます。

【ソニック・ムーブ】

この前ようやく移動魔法を習得しました。

そして一つ結論が出ました。

動きながらチャージすればどうだろうか？

やってみると中々制御が難しいです。

次々落としていくと、この総合練習の本命である人型が出てきました。

私が魔法を使えるようになってから戦ったのは、ゴンザレス君、アリシアちゃん、フェイトちゃんです。

ゴンザレス君が接近戦。

アリシアちゃんが遠距離中距離近距離のオールマイティー。フェイトちゃんがスピードを生かすスピードアタッカー。

私みたいな砲撃型がないのでどれも参考に出来ません。

レイジングハートに頼み、ダミーを私の苦手な接近戦型で相手してもらおうにしてみました。

ゴンザレス君やアリシアちゃんフェイトちゃんのパターンを真似て作って貰おうとしましたが、残念ながら蓄積データが足りないので出来ませんでした。

なので、ダミーにはお兄ちゃんの動きを参考にしてもらうことにしました。

レイジングハートいわくダミーではお兄ちゃんの動きは再現不可能ということなので、かなりアレンジが入っているそうです。

レイジングハートを構え、ディバインバスターをダミーに向けて撃ちましたが簡単に避けられました。

避けるのと同時に人型ダミーは身体を翻し近付いてきます。

【アクセル・シューター】

誘導性能のあるアクセルシューターを一斉に相手に向け発射しました。

実はこの魔力弾は威力が大してありません。そのかわりに数と誘導性能が上がりました。

相手は三つ四つ避けますが防ぎきれなかったりするのもあり、ダメージが蓄積されていきます。

私は引きつつ撃ちつつ距離を近づかせないようアクセルシューターで相手の動きを限定させ、牽制気味にディバインバスターを撃ちます。

相手はとうとうダメージ覚悟でこちらに向け高速で移動してきました。

アクセルシューターでいくらかダメージを与えてきたので最初と比

べ動きが鈍いです。

バインドを仕掛けようと思いますが相手に当たらず焦りが生じてきました。

とうとう相手の射程範囲に入り剣を一振。

私がレイジングハートで受け止めると火花が散りました。

当たったらやばそうなの……。

一撃一撃が重く流して受けてますが腕が痺れます。

【ソニック・ムーブ】

いったん距離を離そうとしますが相手も同じソニックムーブを使い、張り付いてきます。

ガンガンガンガンガン！！

次から次に放たれる剣撃は私の体力を奪っていきます。

「きゃー！」

私は一撃貰い落下していきます。

しかしそれを有効活用するため落下しながら振り返り際にデバイスバスターを三連射しました。

一発目は相手を狙い軽々と避けられ、二発目は相手の近くに設置しておいたスフィアを狙い小規模の爆発を起し相手の視界を遮ぎり、

三発目はかすました。

惜しかったの……

相手は魔力弾を撃ってきました。

【プロテクション】

私はプロテクションを張って魔力弾を防ぎ、お返しとばかりにアクセルシューターを放ちますが相手は魔力弾を使い全て迎撃してきました。

射撃精度が剣士じゃないの……。

それからは空を駆けるドックファイトを行い、私の体力不足で負けました。

私の砲撃は当たればでかいけど当たらなければ意味がない。

あの回避率が異常なのかもしれませんけど……。

しかし、こんなに疲れるとは思ってなかったの……。

第15話

Side アリサ

授業中になのはがおかしい行動をとって……心配だ。

後ろから見るとには普通なのだが、突然身体を傾けたりむむううと唸りながらも手に持つペンは止まらず、見ていてとても奇怪だと思った。

そしてしばらくすると突然ペンが止まった。

隣の席のすずかに、あの奇怪な動きをするのはについての意見を聞いてみることにした。

「ねえすずか、さっきのあの奇妙な動きとか微妙に聞こえてくる唸り声についてどう思う?」

「あ、なのはちゃんのこと?」

分かっているようだ。

「あれじゃ一種のホラーよ。」

周りの奴らも分かっているのか分かってないのか、なのはに注意しないし……だれか突っ込みなさいよ!」

「アリサさんうるさいですよ。」

そんな元気あるなら答えてください」

「πです」

「はい、ありがとうございます。」

次からは静かに授業を受けてくださいね」

「はい」

机に座りずずかとの会話を継続した。

「アリサちゃん惚れていいですか……」

この子もう嫌……。

「それよりなのはことよ」

「確かに……なんか隠し事してるよね」

「私達親友なのに相談もなにもしてくれないなんて……水臭いじゃないの……」

そのとう本人は現在マルチタスクで魔法の練習中。

S i d e 謎の管理局

あれ以降行方不明になったコードネームロストロギア『タイラント』
現れたのは今から約80年前。

わしらをこの姿にしたのもあやつのせいだ。

全長16メートルの戦闘兵器。

全身からは微弱ながら雷が覆われ、あらゆる魔法もその装甲に傷一つ付けられなく、わしらはその圧倒的までの力の前に敗れた。

あの力は聖王のゆりかごと同格…いや…それ以上かもしれん。

わしらはタイラントに復讐すべく研究を重ねていったが身体は老い
寿命が尽きようとしていく。

『あやつに復讐するまでわしらは死ねぬ……』

わしらは身体を捨て頭だけでも生きる決意をする。

そして、現在130才になり、いい加減怪しい歳になったのでデータ
を改ざんしたりもした。

裏から管理局を操り、今タイラントを時空犯罪者として捜索中。
成果はあげられず、このままでは見つかる前に脳死してしまうかも

しれぬ。

それと随分前にアリシア・テストロッサの死亡。と書類では報告されているようだが、何者かがアリシア・テストロッサを生き返らせたようだ。

わしの勘が告げておる。

そやつはタイラントと繋がりがあゝる……と……。

そのためタイラントとは別にわしの優秀な部下にアリシア・テストロッサの搜索をさせておる。

この頃最近アリシア・テストロッサを発見したようで捕獲しようとしたら逆に返り討ちにあつたそうだ。……なんとも嘆かわしい。それとあれから20年以上経っているにも関わらず姿は6才のままだそうだ。

それともう一つ。

やはりというべきか、アリシア・テストロッサとは別に9才ぐらいの子供が居たそうだ。

間違いないなくアリシア・テストロッサを蘇らせた者だろ。

この者ならなにかタイラントの情報を知つてゐるかもしれん。

……いや……操り人かもしれん。

この者も捕獲対象として他の者に通達しておこう。

その施設には、試験管にある不気味な脳が三つ浮かんでいるだけだった。

第16話

S i d e 流星

夕食を買いに近くのスーパーまで寄り家路にっこうと帰る途中に結界の気配を感じた。

ここはスルーと決め込むたいところだが、真っ正面に張られたので先に進めない。

ここは普通に迂回すれば良いのだが、この結界のためだけに迂回するのははつきり言って……ふざけんな……。

何故真っ正面に張った！と少1時間問い詰めたいところだが、あっちにも都合があるのだろう。仕方ないと割り切る以外ない。

でも、このためだけに歩いてきた道に戻るのは嫌だ。

体力的な意味ではなく、意地的な意味で嫌だ。

仕方ない…ちょっとだけお邪魔して速退散。

このプランでいこう……。

しかし、さっきから立ち止まりぶつぶつと呟く俺ってちょっと怪しい？

怪しいな……まあとりあえず

「お邪魔しま……」

「とまれつつつつつつつつつつつつ……！」

絶賛フェイトがジュエルシードを素手で封印中だった。

ジュエルシードを握りしめている拳からは血がほとばしり、フェイトはどこか祈るようにして座り込んでいた。

……これをスルーしていけと……。

どこからともなく感じた視線の先にはなのはが居た。

その視線からは、フェイトちゃんを助けて……と訴えかけているのがびしびしと感ずる。

迂回しときゃ良かったorz

その場合俺がフェイトを見捨てたら、後先視線が痛いだろうし……これは避けられないフラグか！

後の思い出話しに「私が暴走しているジュエルシードを抑えてる時ゴンザレスはただ見てただけだったよね……このヘタレ」

とか出てきたら、俺のプライドがズタズタになったあげく、色んな意味で殺されそう。主にファンに……。

ってー！考えてる時間すら惜しいよ！どうせ死なないから放置なん

て考え今見てるなのはどう思うか……。

あ、いや……これはこれでフラグ除去に使えるのでは……？

「あああああああああ……！！！！！！」

原作よりフェイトがやばいことになってるのだが……。

もう手からは有り得ないぐらい血がドボドボ出てるし……このままじゃ死なないか……？

何故にこうなつ……あ……！さっきからアルフの気配を感じない！居ないのかよ！あのまま山に放置しっぱなしかよ！

まさかアリシアのやったことがここまで響くとは……後でおしよきが必要だな……。

ああ、俺またアリシアの尻拭いかよ！

「フェイト！」

俺はフェイトの近くまで近寄り、フェイトの手を包み込むようにして手を重ねた。

「時間制御開始」

言わなくとも発動出来るのだがここはノリということ。

時間を逆行させたことにより、しだいにジュエルシードの暴走は収まり光はみるみるうちに弱まっていく。

フェイトの手はさっきまで重傷だったが、ジュエルシードと一緒にフェイトの手も傷付く前まで時間を巻き戻した。

フェイトが手を開くと中からはジュエルシードの沈黙した姿が姿を現した。

「ありがとうゴンザレス……あのままだったらたぶん次元震が起きてたと思う。それと私の傷を癒してくれてありがとう……」

後ろを振り返り、フェイトは俺にお礼を言った

「別に……ただの巻き添えだ……フェイトのためにしたことではない……」

この台詞すげーツンデレだ！
痛い痛い痛い痛いいたいいたいいたいイタイイタイイタイイタイ……

「くすつ……でもありがとう。」

あ、でもこのジュエルシードはゴンザレスが封印した物だし、私が持っていていいものじゃない」

そう言つてフェイトはジュエルシードを俺に差し出してきた。

「持つても良いが……このジュエルシード邪魔だから『消す』よ。
マジで」

「くす……なら私に譲つて貰いませんか？」

「？いや元から『俺』はいらないから。」

集めてるのは俺の妹だし」

「そうですか……ならお言葉に甘えてジュエルシード頂いていきます」

そう言つてフェイトはバリアジャケットを解除した。

「あ、そうそう。」

あの狼まだ山の所にいるはずだから探してあげてくれ」

「！ありがとうございます」

そう言つてフェイトはまたバリアジャケットを纏い空を駆けて行った。

「じゃ帰るか……」

「待つて！！」

呼ばれた方を見るとなのはが俺を呼び止めていた。

「ん？なに？俺これから夕食の支度しないといけないんだけど？」

地面に置いた袋を掲げて言った。

「ゴンザレス君はなんでジュエルシードを集めるの！？」

「いや俺は集めてないし……集めてるのはアリシアだし……」

「じゃ！なんでアリシアちゃんはジュエルシードを集めてるの！？」

「そりゃ簡単だな……意味がなきゃ集めないし。だが今知ることでもない……その内嫌でも知ることになるさ現実をな……。ん、じゃ、いい加減帰らないとアリシアになに要求されるか堪ったもんじゃないから俺は早急に帰るわ」

後ろから聞こえる言葉を右から聞いて左に流す。

後は結界を出て家に向かうだけだ。

「お帰りあなた、まず、夕飯にする？お風呂にする？それとも《自

主規制》」

玄関にはエプロンをしたアリシアが出迎えてくれた。

「夕飯もなにも今買ってきたばかりだろうが……風呂は身の危険を感じるので却下。」

《自主規制》はまず歳を考える歳を。お前外見6才だろうが……」

「大丈夫、《自主規制》には歳の差なんて関係ない！

今日はレッドが居ないし……初夜を楽しもうよ」

毎回のごとく下半身に抱き着いてくる。

「夕飯いらないんだな……？」

「お兄ちゃんの精液で我慢します」

「離せ！」

「い・や・だ！」

今日もこんな感じのドタバタで幕を閉じた。

第17話

Side アリシア

え？まずロリコンがムラムラを抑え切れず襲い掛かってきたら、私は手早く気絶させてもう繁殖できないように去勢手術をボルトライトニングのザンバーモードで行います。

見ていて汚らわしいと思うけどやられたらやり返す。これがもつとうですから。

私のお兄ちゃんもあの犯罪ロリコン…ベドだっけ？ぐらい積極性があっても良いと思うけど……あ、もちろん標的は私限定で♪

この前試しに私に襲い掛かったロリコンを返り討ちにして、何故幼女を襲うか聞いてみました。

もしかすると、意外な手掛かりが手に入るかもしれません。

「なんで私に襲い掛かったのかな？」

軽く手足の関節を外したデブオタに、私を襲った理由を聞いてみました。

「金髪幼女萌えっ！！」

それしか言わないので、警察を呼んで放置することにしました。

夜に出歩くとたまにサラリーマンらしき人が襲い掛かります。

私はそれをしばきあげ私を襲った理由を聞いてみたした。

「お嬢ちゃんが可愛すぎなんだよ！」

お兄ちゃんが言ってくれば嬉しいのだけでも、こんなサラリーマンに言われても嬉しくありません。

そのサラリーマンは暴力団に襲われた後みたいに気絶させて、ゴミ捨て場のゴミに埋もれてもらいました。

昼過ぎあたり人気の無い所でボーツとしていたら誘拐されました。

男は私を無理矢理車に押し込め、車内で私の胸を触ろうとしたので、力加減を間違えて車が爆発しました。

ありがとうボルトライトニング……（プロテクション的な意味で）

その後、近所で騒がれましたが私は偶然通り掛かった金髪少女として野次の中にいました。

ある日歩いていたら警察の人が来て、学校はどうしたんだい？と聞

いてきたので卒業しましたと答えたら、ちょっとおいでと警察署まで連行されました。

「ああ、まず名前、住所、保護者の名前は？」

「私の名前は八神アリシア。住所は私わかんない、夫は八神流星です」

「名字は八神か……って遊びじゃないんだから保護者の名前ぐらいちゃんと言おうね」

「あえていうなら……プレシア・テストロッサ？」

「何故に疑問形……」

「私のことはいいから帰してもらえますか……？」

「いや、お茶ですから飲んでいかないかい？」

そう言つと警察官はお茶をだした。

（このお茶の成分からは睡眠薬が検出されました）

そうボルトライトニングが告げてきた。

ああ……やっぱり目からして危ない人とは分かっていたけど……大丈夫かな日本警察……。

「いえ結構なので……」

「そうかい…残念だね」

あまり押しが強くなり、たぶん釣ればいいなあ〜と思っているくらいだったのだろう。

しかし、この身を削ってまで手に入れた情報は少なく、たいした成果はあげられませんでした。

なので……今度はネットの金髪少女を語る会のチャットを試みることにしました。

……ネット喫茶が使えなかった……。

受付の人に、来るなら今度は保護者と一緒にね。と言われネットを使うことは出来ませんでした。

前にボルトライティングを使って情報を得ようとしたが、いかがわしい情報入手しようとするエラーが起こる。

完全に兄ちゃんの仕業だ。

たまたま通り掛かるアニメーションのムービーにこんな台詞がありました。

『べ、別にあんたのためじゃないんだからね!!』

こ、これだ！私に足りないのは魅力じゃなかった。

違うバリエーションだ！

こんな簡単に見つかるとは……さすがアニメの国ジャポン。

家に帰ったら早速試したいと思います。

「べ、別に一緒に初夜を迎えたいわけじゃないんだからね！勘違いしないでね！」

「おお……それは朗報だ。」

じゃそれと一緒に夜這もやめてくれ。

「これによつやく俺に平穩がくる」

凄く冷たかった……。

「べ、別にそっちから夜這しても構わないんだからね！」

「やらねえよ……」

効き目がない……。

どうしたら振り向いてくれるの！

.....アレだ.....アニメである、常に有るものがないと寂しく感じる。これを試しにやってみよう。

フフフッ……これでお兄ちゃんも私のだ。

お兄ちゃんから離れて2時間後……。

まだまだ平気………なんたってこっちはお兄ちゃんの写真があるん

だから！
寂しくないんだからね！

4 時後……。

いい加減お兄ちゃん分の不足が限界に達してきた。
しかし、私には秘密兵器お兄ちゃんの枕がある。なんとこれはお兄ちゃんが日常生活で使用している優れ物！濃度の高いお兄ちゃん分を補給出来るのだ！

ああー枕からお兄ちゃんの臭いがする……。……幸せ……。

6 時間後……。

枕からすっかりお兄ちゃんの臭いが消え、私のよだれしか付いていない。

枕からはお兄ちゃんの臭いの代わりに私の体臭が漂います。

どこかお兄ちゃんが遠くに逝ってしまった……。そんな錯覚さえ感じます。

8 時間後……。

動悸と息切れが激しい。頭痛もして今ならスライム一匹すら太刀打ち出来ないほど弱っていた。

私の部屋からはどこからもお兄ちゃんの臭いがしない……禁断症状末期です……。

せめて、お兄ちゃんのパンツがあれば後2時間は戦えるのに……。

「おい、アリシア人の枕かえ…うお！」

私の鼻孔をくすぐる臭いが近くにきました。

私はすぐさま抱き着き肺にいっぱい吸い込みました。

脳内リフレッシュでも足りない……。

身体が疼く、疼いて疼いてうずいて疼いて疼いて疼いて！

足りない……

服から伝わる体温。

服から伝わる臭い。

服から伝わる鼓動。

私は舌を伸ばし、服の上からお兄ちゃんの肌を舐め上げた。

汗の臭いをほんのり感じる。

あゝ お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん
 ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄
 ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄
 ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄
 ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄

「お兄ちゃん……今すぐキスしてくれないと私死にそう……」

「はあ……ほらよ……」

違う額じゃない！

□にして□に！！

「お兄ちゃん口にして……」

出来るだけ切なそうな声を上げた。

「却下」

(ボルトライティング……誓約解除……)

（イエス、マスター）

今日は本気で色々力尽で載っていくよ……。

「ライジング・ブレイカー！！！」

これなら……！

「はぁ……末期症状でまともな思考ができなくなったか……いや俺も解るけどねその気持ち……でも……」

馬鹿な！私の全力全快のライジング・ブレイカーでダメージひとつ受けてない。

「もう少し落ち着こうか……」

最後に聞こえたのはお兄ちゃんのそんな言葉だった。
私は意識を失った。

目が覚めてまず先に見たものはお兄ちゃんの寝顔でした。

凄い驚きだ！

「……あ、起きたか……。まあ、俺もあんた所で寝るとは言わん……それにアリシア身体が動かないだろ？」

確かに声は出せそうだけど身体はあまり動かない。

「凄いなオイ。」

誓約解除したのにもう身体が治ってきてるのかよ」

「誓約解除ってこんなに反動でかいんだね……」

「当たり前だろ。」

切り札がホイホイ使えたら切り札にならないだろ……たぶん」

「確かに……」。

でもそれより、お兄ちゃんと一緒に寝るのほんと久しぶりな気がする。

これは襲っていいということでしょうか？」

「そんな身体でやれるもんならやってみろ」

お兄ちゃんから許可も頂き、襲おうとしますが今度は身体が全然動かない……。

「ああ…やっぱりな…」

「なにがやっぱりなのお兄ちゃん……？」

「秘密だ」

むう。

「よつと」

お兄ちゃんが私を抱き寄せた。

心臓バクバク、リンカーコアは活性化中。
後、性的な意味でみなぎってきました。

「お兄ちゃん／＼／＼／」

絶好の位置。これで身体が動けば……！

「無駄無駄。これホールドだから」

油断ならぬお兄ちゃんです……。

「お兄ちゃん…オシッコ……飲む？」

「急激な熱で蒸発させてやろうか」

ガクガクブルブル。

「ん、じゃお休み」

「お休みお兄ちゃん……」

でもこれはこれで……お兄ちゃんと一緒のベッドで寝られて幸福です。」

「なんじゃこりゃ!！」

そこにはアリシアのゆだれをべったりと付けた姿で起床した男がそこにいた。

第18話

海上付近上空。

二人の少女は、己の思いを秘めた魔法を力に、敵対する存在を討ち滅ぼす。

風が吹き荒れる。

なのはのリボンは風に揺れ、フェイトのマントはなびく。

「フェイトちゃん……」

「なのは……」

両者の目に迷いはなく、純粹までにあるのは戦う決意。

「フェイトちゃん……私はジュエルシードは渡せない。

私はユーノ君の探し物を協力して探してる。

フェイトは少なくともジュエルシードを集めてる。

二人仲良く半分個とはいかないの……。

だから…フェイトちゃん…これが終わったら友達から始めよう……。

そして今は戦おう…悔いが残らないように己の全力をぶつけて！

いくよレイジングハート！」

【イエス、マスター】

「そうだねなのは…今の私達は敵どうし、だから…私、フェイト・テストロツサは高町なのはを打ち倒す！バルディッシュ！」

【イエス、sir】

「いくよフェイトちゃん!!」

【デイベイン】

「バスター!!」

フェイトは横に避けピンクの光を回避した。

光はフェイトの横を通過し、空へ消えていった。

「サンダーレイジ!!」

お返しとばかりにフェイトからは雷そのものが放たれ、なのはを襲う。

【ソニック・ムーブ】

当たる直前にソニックムーブを発動、雷はなのはの横を通過し、虚空へと消えていった。

「フォトン・ランサー!!」

「アクセル・シューター!!」

全く同時に放たれた。

両者の魔力弾はことごとく相殺され、数発程度が弾幕をぐぐり抜け、標的に向かって突き進む。

【プロテクション】

【ラウンドシールド】

魔力弾は障壁に阻まれた。

爆煙に包まれ両者の姿は確認出来ぬ。

しばらくし、煙が晴れると無傷の二人の姿がそこにあった。

【ソニック・ムーブ】

【ソニック・ムーブ】

フェイトはなのはに距離を詰めるべく移動。

なのははフェイトが接近戦することを推測、後ろに向かい移動。引きつつ撃ちつつの戦術に変え距離を詰めさせない。

「デイベインバスター三連バースト!!」

ドンドンドン!!

デイベインバスターが三連射された。

このデイベインバスターは収縮されたデイベインバスターとは違い、威力も距離も落ちたが、当たれば致命傷な相手にとっては相性がいい。

発射間隔わずか一秒。

威力は落ちだがそれでもなのは撃つ魔法の威力は術者に依存する。
つまり、人一人を気絶させるには十分すぎる威力なのだ。

一撃目はフェイトの持つバルディッシュに弾かれ、二発目はフェイトの近くを漂っていたスフィアに直撃、スフィアは爆発を起こしフェイトにダメージを与える。
そして三発目が本命！

「ブレイク・シューター！」

三発目は爆煙の中で大爆発を起こした。

【ソニック・ムーブ】

レイジングハートとは違う電子音が聞こえる。

「はぁーっ！ー！」

フェイトは鎌を振り下ろし、魔力刃がざっくりとなのはの肩に突き刺さった。

「~~~~っ！ー！！」

思わぬ痛みにも肩を押さえるのは。

「貴方の負けです……」

そこには煤だらけで、所々のバリアジャケットに被れヶ所が見える。どうやらフェイトはあの攻撃にただでは済まず大分ダメージを負っているようだ。

「……いや私の勝ちだよフェイトちゃん……」

「貴方は十分戦いました。」

これ以上無理する必要はないんだよなのは……」

なのはにニツコリ笑うフェイト。

なのははそんな笑顔がとても綺麗だと思った。

「にやはは……。」

フェイトちゃん心配してくれるのは嬉しいけど私はまだ諦めてないよ」

突然、髪を束ねていたリボンを外し、魔力刃で利かなくなった手にリボンでレイジングハートを固定した。

「なのは……なんで君はそこまで……」

「フェイトちゃん……私は魔法の力を手に入れたとき、初めて私にもなにか出来るんだ……そう思ったの。」

でも、此处で負けてしまったら私はなんのために魔法を手に入れたのか分からなくなっちゃう……だから私は自分の存在意義にかけてこの一撃でフェイト……貴方を倒す」

「そんなのは撃たせない……！」

ハーケン・セイバー!!」

フェイトの魔法がガリガリとなのはのプロテクションを削っていく。
フェイトにも疲れがあるのか技に切れがない。

「レイジングハート……外付けY接続……転移……」

【イエス】

「あれ？なのは……？」

空気に場違いだったためユーノは遠くからなのはを見ていたのに
かわらず、突然なのはの元に転移したことに驚いていた。

「使い魔……」

「違うよフェイトちゃん……」

この間にもプロテクションは削れ、なのはから守りが消えていく。

【ユーノ良かったですね、出番が増えて】

何故か嫌な予感に汗ダラダラのユーノ。

「あの、なのは……」

ギョッ!!

左手にユーノを持ちレイジングハートの上に乗せた。

「いったいなにを……」

「バリア・ブレイク!!」

なのは己の守りの壁を爆発させ、いったんフェイトと距離を取った。

「いくよ!E缶!!」

「え!?それって僕!!」

清々しくも言うなのはにユーノ涙目。

「っ!!バインド!!」

フェイトはなのはのバインドに捕まり、身動きがとれないでいた。

「受けてみてこれが私の……アクセルシューターのバリエーション
!!」

上空には数え切れないほどのスフィアが待機していた。

「魔力が吸われる」

ユーノはなのはの代わりに魔力供給をレイジングハートに行い、スフィアを作るため魔力を無理矢理絞り上げられていた。
言い方を変えればE缶。

【ルナティック・シューター】

「ルナティツケ・シューター!!!」

振り下ろした杖と連動してまるで流星のごとくフェイトに降り注いだ。

フェイトに当たるシューターは小規模の爆発を起こし、フェイトを中心にシューターは動きを止める。

「バースト!!」

そして全てのシューターは爆発を起こした。

かのように見えた……。

それは一人の少年に止められた。

「随分徹底的だなオイ」

金色の瞳に黒髪、腰には刀を滞納している。

「ええ……なにこのガチバトル……クロノはどこいったよ」

流星はポリポリ頭をかきながら二人を見渡した。

「ゴンザレス……」

いつの間にかフェイトのバインドは解かれており、その顔にはうっすらと怒りがあつた。

「なんで…邪魔したの……」

「なあ……それ本当に言ってるのか……?」

「「えっ……?」」

なのはとフェイトの声が重なった。

「お前らの攻撃、そのユーノが張った結界をぶち破って俺のどこまで来てたぞ……」

なお、昼間に雷が落ちたという珍しいことがどこかで起こったそう
だ。

「にやははは……」

乾いた声でなのはが笑った。

「はあ……じゃ俺帰るから」

そう言ってゴンザレスは帰っていった。

「あ、そうそう」

かと思ったら帰ってきた。

「封印」

この原因となっているジュエルシードを流星は封印した。

「これ以上ボロボロになるのもあれだろうし、ジャンケンで決めればどうだ……?じゃあな」

「フェイトちゃん……」

「なのは……」

二人は目を合わせた。

「最初はグー、ジャンケン……」

ボロボロになった姿でのジャンケンは今中にシニールであった。

アルフはフェイトに念波でとめられ、二人の戦いを観戦していた。

「フェイト……」

アルフの弦音がフェイトに届くことはなかった。

第19話

side アリシア

なにこの子怖い……。

空気の読めなさ的な意味で。

そう何故か直感的に感じ取った。

「アリシア・テストロッサだな」

私が木陰でお兄ちゃんを待っていると、そいつはタイミングよく現れた。

179

私の名前を知っているってことは管理局かな。

管理局ってことはどうせくだらないことだとは思っけど……。

せめてお兄ちゃんが居たときに来てもらいたかったな。

私のテンションゲージはお兄ちゃんが居ないことによってげしげしと削れ、相手にしてあげる気すら起きなかった。

「……………」

「少しぐらい反応したらどうだ……?」

仕方なく顔を上げると、黒髪の子がヒクヒクとこめかみを引き攣らせていた。

「管理局……？」

「ああそうだ。」

僕の名前は時空管理局執務官クロノ・ハラウン。
管理局本部からアリシア・テストロッサの保護要請がきている。
僕と一緒にアースラーまで大人しくきてもらおうか」

さすが管理局は偉そうです。

それと保護対象とは……。

もしかして時空放浪者と同じ扱い？

でもそれだけじゃないよね…きっと……。

「保護要請って、私がいったい何したっていうの？」

「僕には分からない。」

上層部からの命令でアリシア・テストロッサを保護せよと言われた
だけに過ぎない。

君が何をしたかはこの際関係ない、僕はただ君を管理局本部まで連
れていくことが目的だ」

ふむふむ、上司からの命令に忠実に従う……確かに優秀かもね。

「人が嫌って言うたら引き返しててくれるのかな？」

「残念ながらそれは出来ない。」

上からは無理にでも連れてこいと言われていてね、実に心苦しいの
だけでも実力行使で君を連れていく」

クロノはカードの形のしたデバイスを片手に、アリシアと対峙した。

「それって私と戦うってことで良いんだよね？」

アリシアは首に掛けてあるペンダントを握りしめ、クロノと対峙した。

「本当は平和的解決が望ましいのだが…仕方ない『S2U』セットアップ！」

クロノは普段着から黒のバリアジャケットに変わり、カードは形を変え、手には魔導師の杖が握られていた。

「私も戦うのはあまり好きじゃないんだけど…多少憂さ晴らしに付き合ってもらうよ。『ボルトライトニング』セットアップ！」

私は、ボルトライトニングのサイズモードを両手に持ちクロノに向けて矛先を向けました。

「結界は大丈夫だね？」

念のため確認をとっておきます。

さすがに結界のない状況で戦うのはアレなので……。

「ああ、問題ない。」

結界なら君に接触するその前に張ってあるから問題ない」

さすが管理局は仕事が早いね……。

「試合の開始合図どうする？」

私は皮肉を含んだ言葉でクロノを挑発しますが。

「お先に」

平然とした顔で返してきました。

「ならいきなりプラズマスマッシャー!!」

クロノは後ろに下がりながらもプロテクションで防ぎ、ダメージを最小限まで抑え込んだみたい。

……全力でやればよかった……。

後悔するけどクロノは後ろに下がり魔力弾をこちらに向け発射した。

速!!

かなりの速さの魔力弾がこちらに迫って来ますが、咄嗟の判断により空に飛び回避した。

その隙にクロノは更に魔力弾で追撃をしますが、魔力刃によりすべて打ち消した。

「ブレイズキャノン!!」

【ソニック・ムーブ】

ブレイズキャノンをソニックムーブにより回避し、クロノに向けてフォトンランサーの乱射をお見舞いした。

それをクロノは適切に判断し、回避行動をとりながら距離を縮めてくる。

「『ボルトライトニング』サンバーモード」

【イエス】

私はフォトンランサーを打ち止め、ボルトライトニングをサンバーモードに変更した。

「はぁあああ!!」

魔力刃をクロノに向けて打ち出した。

クロノはとくに焦らず魔力刃を回避し、魔力弾を打ちながらこちらに向かって直進してきている。

これをチャンスと思った私は、サンバーモードの魔力斬撃をクロノに向けて撃ち出した。

「そんなに魔力使って君は持つのかな？」

「魔力は使ってなんぼだよ!!」

「それは持っているやつが言えることだ……」

クロノはデバイスをまるで鈍器を扱うが如く、私に向けて振りおろしてきた。

私はぎりぎりのところでクロノの一撃をサンバーモードの柄の部分で防いだ。

「魔力刃ないし、私を撲殺するつもり!？」

「当たっても少し青痣ができる程度だ。ちゃんと加減はしている」

手加減してくれてるみたいだけど、青痣とか一生の問題だよ！

いや、たしかに治療すれば治るけどそれはそれ、これはこれ、乙女に傷を付けるのはダメでしょ！

あ、でもお兄ちゃんになら傷物にされてもいいな、むしろしてださい！

「君はもつと真面目に出来ないのか……」

「私はいつも真面目だよ！」

クロノのデバイスを弾き返し、一閃。

移動魔法によりクロノは安全地帯に退避することによりアリシアの一閃を避けた。

すぐさま追撃を掛けようとフォトンランサーで牽制しながら近づくが、クロノも魔力弾を使い牽制してくるもんだから中々近づけない。

魔力弾による撃ち合いにより、もはや弾幕を張って闘っているようにしか見えない。

アリシアはクロノの魔力弾を避けながら、フォトンランサーと更には魔力刃を飛ばし攻撃を仕掛けている。

クロノはアリシアの魔力刃と魔力弾を紙一重で回避しながら、正確にアリシアを魔力弾で動かしながら冷静に魔力弾を撃っていた。

いつまでもこうしているわけにもいかないということに、アリシアは焦りを感じていた。

『スピード』ではアリシアが上。

『戦闘技術』ではクロノが上回る。

一気に攻め込めば隙を突かれ墮とされる可能性が出てくるが、このままの硬直状態を打破するにはどちらかが動き出すしかない。しかしどちらにもそんな余裕があるはずもなく、避け撃ち返すが精一杯の状況が続く。

アリシアにしては珍しく誘導弾で揺さ振りを掛けるが、やはりというべきか不得意な魔法は制御が甘くすぐさまクロノに撃ち落とされる。

アリシアはサンバーモードを解除し、ボルトライトニングを杖の形に変え、後退しながら慎重に魔力弾を撃ち落としていく。

【ソニック・ムーブ】

アリシアはソニックムーブにより大きく後退し、クロノから逃げるようにして距離をとった。

「へばってきたのか……いや違う……！」

距離をとったことにより回避行動をする必要がなくなり、アリシアは魔法の制御に集中することができた。

アリシアの周りにはフォトンランサーのスフィアがただずんでおり、我が身をスパークさせながら術者の指示を待っている。

「フォトンランサー・フランクシフト。撃ち滅ぼせ、ファイヤー……！」

クロノはプロテクションを張り防いだ。

しかしフォトンランサーを受け続けたせいか、しだいにプロテクションの構築に限界が生じ、罅が入り粉々に碎け散った。

「うわぁああぁー!!」

クロノにフォトンランサーが直撃し墜落していく。

「バリアジャケットあるし、ある程度の物理的衝撃は防いでくれるから大丈夫だよね……たぶん……」

アリシアはバリアジャケットを解除し地上に降り立った。

それと同時に結界を破壊した。

「管理局とのことお兄ちゃんと相談しなきゃ」

そう考えた矢先。

「管理局か…やれやれめんどくさい」

地面に突っ伏しているクロノを横目に、流星はため息を一つ。
非常にめんどくさそうにしてその場立っている。

「お兄ちゃん!!」

流星に気がついたアリシアは疾風の如く移動し、抱きつこうとするが、

「せい!」

「なんと!?!」

あり得ない速度により繰り出された足技にアリシアは反応できず、こけた。

「いたあゝい！何気にひどいよお兄ちゃん」

「次の行動が読めていて避けない方がどうかしてると思うぞ」

「これが私の愛なのに……」

ポツリつぶやくアリシアに流星は頭を押さえていた。

「お前の場合行き過ぎなんだよ……そこんどこ気がつけよ」

「気が付いてるよ。でもね、体が勝手に動いちゃんだよ。仕方ないんだよお兄ちゃんが魅力過ぎてメスとしての本能が襲えと……」

「歳に合わず危険な発言を……こんな公園で堂々と言うな……」

「私はいつでもフルオープンだからね」

「だから俺にどうしろと」

「お兄ちゃんに援助交際を求めます！」

「却下だ…アホ…」

「理由を言つてよ！」

「ポルノ法に滅茶苦茶引つかかるだろうが……！」

「関係ないよ!!」

「断言しやがったコイツ!」

「お兄ちゃん愛してるうううう!!!!」

「ああ、知らない。コイツ誰?

近所の子ですか?

最近の子は公園の中心で愛を叫ぶんですね」

流星は知らないふりをいつつ、アリシアとは無関係と装うとしたが、

「私妊娠しました!!」

皆さん聞いてください!!

この人の子がお腹の中にいるんです!! (流星の方を指でさしながら)

愛し合ってるんです!!

彼が愛を囁き私を離してくれないんです!!

私はお兄ちゃんの肉便器です!! お兄ちゃん限定の肉便器です!!

何度でも言いますが私はお兄ちゃん専用の肉便器です!!

14歳の母なんて目じゃありません! でも私現実と戦い幸せを勝ち取って見せます!

何度でも言うようですが私はお兄ちゃんの肉便器です!!

理科で言うおしべとめしべがくっ付いた仲です!!

皆さん…ガハッ!!」

流星はアリシアの頭を紫電の峰で思いつき叩いた。

「お兄ちゃん痛いよ」。

おつとよだが」

「アリシアお前は俺を社会的に抹殺するつもりか…少しは自重しろ」

「ハッハッハ！でもこれでみんなに私とお兄ちゃんの仲が伝わったね！」

「アリシア見えるか…あそこに青い服着た人がいるけど、意味わかるか？」

アリシアがさつきから不適切な言葉を民衆のいる所で大音量で叫んでたから、だれかが呼んだんだよ。け・い・さ・つを！！」

「逃げようお兄ちゃん……」

「切り替わるの早いなオイ」

民衆の視線を背に流星達は公園から全力で退散した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4783n/>

リリカルなのはアネタ？

2011年9月1日13時24分発行